

23  
1

官令全報第四十八號附錄

刑法

刑法附則

治罪法

治罪法參考諸布令

合卷

明治十五年二月增補刊行



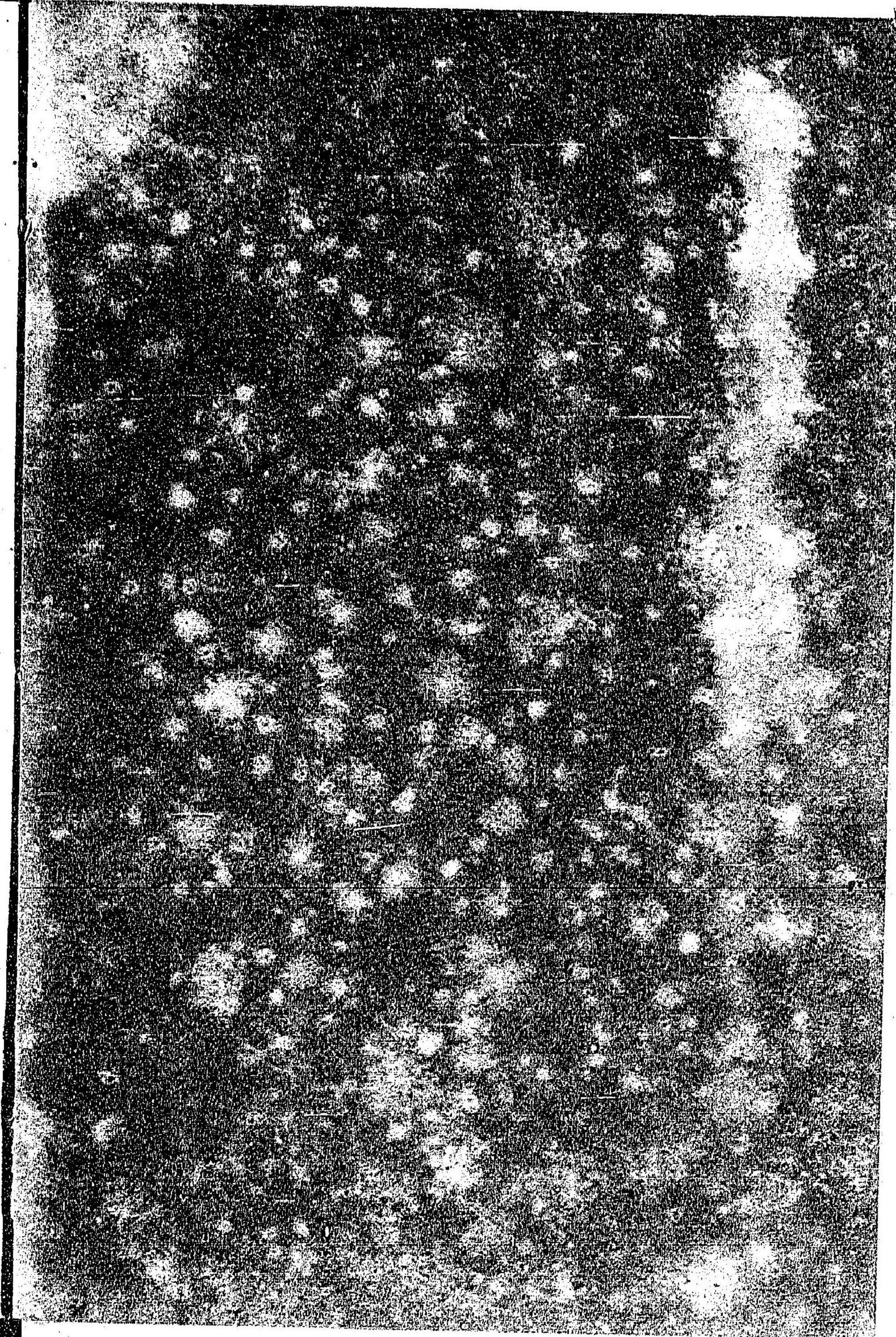
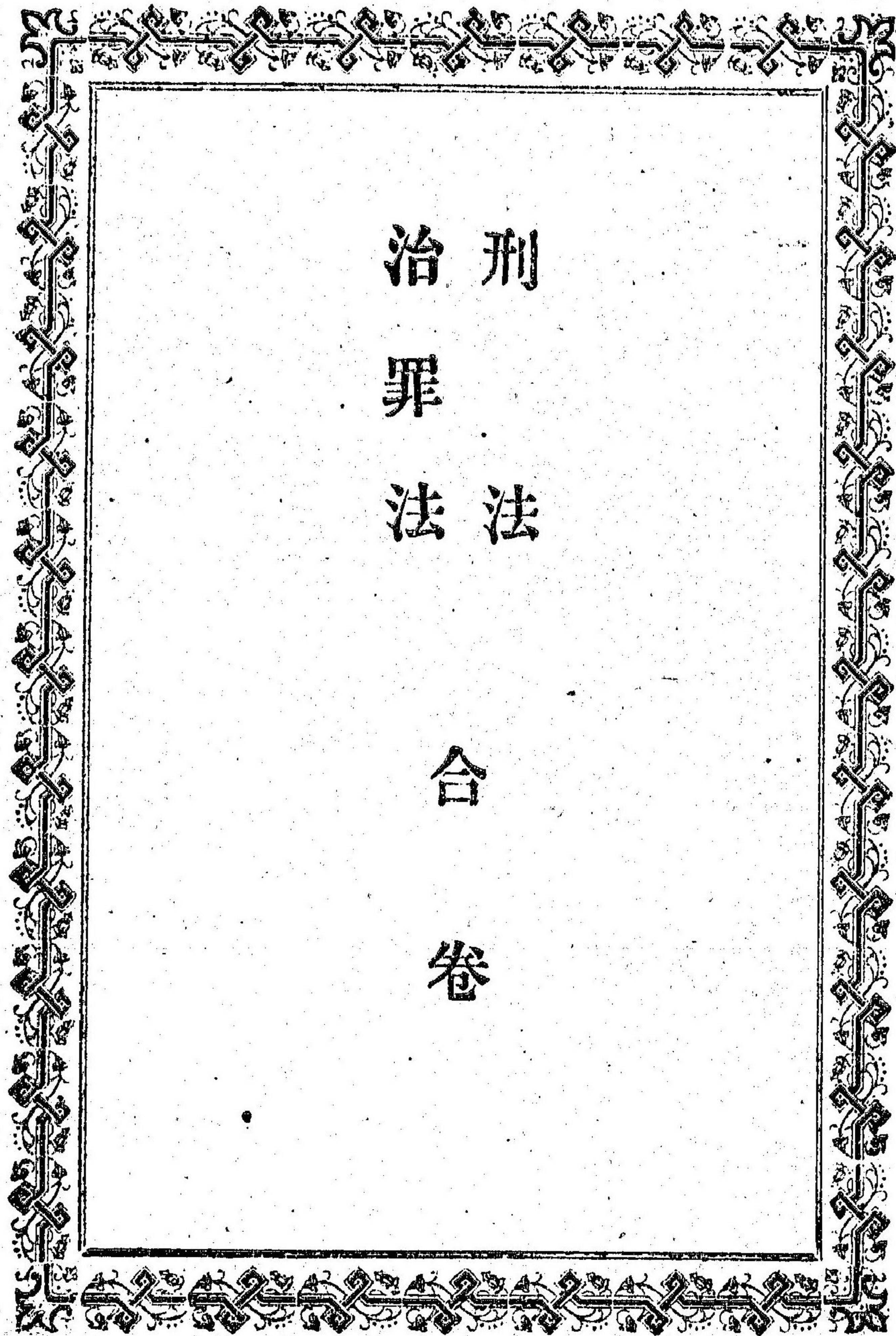
3E-52

特 14

821

刑 治  
罪 法  
法 法

合  
卷





CZ  
711  
0/25

刑法目錄

第一編 總則

第一章 法例

第二章 刑例

第一節 刑名

第二節 主刑處分

第三節 附加刑處分

第四節 徵償處分

第五節 刑期計算

第六節 假出獄

第七節 期滿免除

第八節 復權

第三章 加減例

第四章 不論罪及七減輕

第一節 不論罪及七宥恕減輕

第二節 自首減輕

第三節 酌量減輕

第五章 再犯加重

第六章 加減順序

第七章 數罪併發

第八章 數人共犯

第一節 正犯

刑法目錄



第二節 從犯

第九章 未遂犯罪

第十章 親屬例

第二編 公益ニ關スル重罪輕罪

第一章 皇室ニ對スル罪

第二章 國事ニ關スル罪

第一節 内亂ニ關スル罪

第二節 外患ニ關スル罪

第三章 靜謐ヲ害スル罪

第一節 兇徒聚衆ノ罪

第二節 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

第三節 囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

第四節 附加刑ノ執行ヲ遅ルノ罪

第五節 私ニ軍用ノ銃砲彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪

第六節 往來通信ヲ妨害スル罪

第七節 人ノ住所ヲ侵スル罪

第八節 官ノ封印ヲ破壞スル罪

第九節 公務ヲ行フヲ拒ム罪

第四章 信用ヲ害スル罪

第一節 貨幣ヲ偽造スル罪

第二節 官印ヲ偽造スル罪

第三節 官ノ文書ヲ偽造スル罪

第四節 私印私書ヲ偽造スル罪

第五節 免狀儲札及ヒ疾病證書ヲ偽造スル罪

第六節 偽證ノ罪

第七節 度量衡ヲ偽造スル罪

第八節 身分ヲ詐稱スル罪

第九節 公選ノ投票ヲ偽造スル罪

第五章 健康ヲ害スル罪

第一節 阿片烟ニ關スル罪

第二節 飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪

第三節 傳染病豫防規則ニ關スル罪

第四節 危害品及ヒ健康ヲ害ス可キ物品製造ノ規則ニ關スル罪

第五節 健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪

第六節 私ニ醫業ヲ爲スル罪

第六章 風俗ヲ害スル罪

第七章 死屍ヲ毀壞シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪

第八章 商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪

第九章 官吏瀆職ノ罪

第一節 官吏公益ヲ害スル罪

第二節 官吏人民ニ對スル罪

第三節 官吏財産ニ對スル罪

第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪

第一章 身體ニ對スル罪

刑法目錄



- 第一節 謀殺故殺ノ罪
  - 第二節 毆打創傷ノ罪
  - 第三節 殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不諭罪
  - 第四節 過失殺傷ノ罪
  - 第五節 自殺ニ關スル罪
  - 第六節 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪
  - 第七節 脅迫ノ罪
  - 第八節 隨貽ノ罪
  - 第九節 幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪
  - 第十節 幼者ヲ略取誘拐スル罪
  - 第十一節 猥褻姦淫重婚ノ罪
  - 第十二節 誣告及ヒ誹毀ノ罪
  - 第十三節 祖父母父母ニ對スル罪
- 第二章 財產ニ對スル罪
- 第一節 竊盜ノ罪
  - 第二節 強盜ノ罪
  - 第三節 遺失物理藏物ニ關スル罪
  - 第四節 家資分散ニ關スル罪
  - 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪
  - 第六節 贓物ニ關スル罪
  - 第七節 放火失火ノ罪
  - 第八節 決水ノ罪

- 第九節 船舶ヲ覆沒スル罪
  - 第十節 家屋品物ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪
- 第四編 違警罪



刑法

第一編 總則

第一章 法例

第一條 凡法律ニ於テ罰ス可キ罪別テ三種ト爲ス

一重罪

二輕罪

三違警罪

第二條 法律ニ正條ナキ者ハ何等ノ所爲ト雖モ之ヲ罰スルコトヲ得ス

第三條 法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスコトヲ得ス

若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サル者ハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス

第四條 此刑法ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ論ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第五條 此刑法ニ正條ナクシテ他ノ法律規則ニ刑名アル者ハ各其法律規則ニ從テ

若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケザル者ハ此刑法ノ總則ニ從テ

第二章 刑例

第一節 刑名

第六條 刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス

主刑ハ之ヲ宣告ス

附加刑ハ法律ニ於テ其宣告スル者ト宣告セザル者トヲ定ム

第七條 左ニ記載シタル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス

一死刑

二無期徒刑

三有期徒刑

四無期徒刑

刑法



五有期流刑

六重懲役

七輕懲役

八重禁錮

九輕禁錮

第八條 左ニ記載シタル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス

一重禁錮

二輕禁錮

三罰金

第九條 左ニ記載シタル者ヲ以テ違警罪ノ主刑ト爲ス

一拘留

二科料

第十條 左ニ記載シタル者ヲ以テ附加刑ト爲ス

一剝奪公權

二停止公權

三禁治産

四監視

五罰金

六沒收

第十一條 刑ヲ執行シ及ヒ犯人ヲ檢束スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第二節 主刑處分

第十二條 死刑ハ絞首ス但規則ニ定ムル所ノ官吏臨檢シ獄内ニ於テ之ヲ行フ

第十三條 死刑ハ司法卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行フコトヲ得ス

第十四條 大祀令節國祭ノ日ハ死刑ヲ行フコトヲ禁ス

第十五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懷胎ナル時ハ其執行ヲ停メ分娩後一百日ヲ經ルニ非サレハ刑ヲ行ハス

第十六條 死刑ノ遺骸ハ親屬故舊請フ者アレハ之ヲ下付ス但式ヲ用ヒテ葬ルコトヲ許サス

第十七條 徒刑ハ無期有期ヲ分タス島地ニ發遣シ定役ニ服ス

有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第十八條 徒刑ノ婦女ハ島地ニ發遣セシ内地ノ懲役場ニ於テ定役ニ服ス

第十九條 徒刑ノ囚六十歳ニ滿ル者ハ通常ノ定役ヲ免シ其體力相當ノ定役ニ服ス

第二十條 流刑ハ無期有期ヲ分タス嶋地ノ獄ニ幽閉シ定役ニ服セス

有期流刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第二十一條 無期流刑ノ囚五年ヲ經過スレハ行政ノ處分ヲ以テ幽閉ヲ免シ嶋地ニ於テ地ヲ限リ居住セシムルコトヲ得

有期流刑ノ囚三年ヲ經過スル者亦同シ

第二十二條 懲役ハ内地ノ懲役場ニ入レ定役ニ服ス但六十歳ニ滿ル者ハ第十九條ノ例ニ從フ

重懲役ハ九年以上十一年以下輕懲役ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十三條 禁錮ハ内地ノ獄ニ入レ定役ニ服セス

重禁錮ハ九年以上十一年以下輕禁錮ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十四條 禁錮ハ禁錮場ニ留置シ重禁錮ハ定役ニ服シ輕禁錮ハ定役ニ服セス

禁錮ハ重輕ヲ分タシ十一日以上五年以下ト爲シ仍ハ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十五條 定役ニ服スル囚人ノ工錢ハ監獄ノ規則ニ從ヒ其幾分ヲ獄舎ノ費用ニ供シ其幾分ヲ囚人ニ給與ス但現役百日以内ハ給與ノ限ニ在ラズ

第二十六條 罰金ハ二圓以上十圓以下ト爲シ仍ハ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

第二十七條 罰金ハ裁判確定ノ日ヨリ一月内ニ納完セシム若シ限内納完セサル者ハ一圓ヲ一日

刑法



四

ニ折算シ之ヲ輕禁錮ニ換フ其一日ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス  
罰金ヲ禁錮ニ換フル者ハ更ニ裁判ヲ用ヒテ檢察官ノ求ニ因リ裁判官之ヲ命ス但禁錮ノ期限ハ  
二年ニ過ツルコトヲ得ス

若シ禁錮限内罰金ヲ納メタル時ハ其經過シタル日數ヲ扣減シテ禁錮ヲ免ス親屬其他ノ者代テ  
罰金ヲ納メタル時亦同シ  
第二十八條 拘留ハ拘留所ニ留置シ定役ニ服セス其刑期ハ一日以上十日以下ト爲シ仍ホ各本條  
ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十九條 科料ハ五圓以上一圓九十五圓以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス  
第三十條 科料ハ裁判確定ノ日ヨリ十日内ニ納完セシム若シ限内納完セサル者ハ第二十七條ノ  
例ニ照シ之ヲ拘留ニ換フ

第三節 附加刑處分

第三十一條 剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス

一 國民ノ特權

二 官吏ト爲ルノ權

三 勳章年金位記貴號恩給ヲ有スルノ權

四 外國ノ勳章ヲ佩用スルノ權

五 兵籍ニ入ルノ權

六 裁判所ニ於テ證人ト爲ルノ權但單ニ事實ヲ陳述スルハ此限ニ在ラス

七 後見人ト爲ルノ權其親屬ノ許可ヲ得テ子孫ノ爲メニスルハ此限ニ在ラス

八 分擔者ノ管財人ト爲リ又ハ會社及ヒ共有財産ヲ管理スルノ權

九 學校長及ヒ教師學監ト爲ルノ權

第三十二條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒテ終身公權ヲ剝奪ス

第三十三條 禁錮ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒテ現任ノ官職ヲ失ヒ及ヒ其刑期間公權ヲ

行フコトヲ停止ス

第三十四條 輕罪ノ刑ニ於テ監視ニ付シタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒテ監視ノ期限間公權ヲ行フコト  
ヲ停止ス

主刑ヲ免シテ止テ監視ニ付シタル者亦同シ

第三十五條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒテ其主刑ノ終ルマテ自ラ財産ヲ治ム  
ルコトヲ禁ス

第三十六條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル時ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルコトヲ  
得

第三十七條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒテ各本刑ノ短期三分ノ一ニ等シキ時  
間監視ニ付ス

第三十八條 輕罪ノ刑ニ附加スル監視ハ之ヲ宣告ス但本條ニ記載スルノ外監視ニ付スルコトヲ得  
ス

第三十九條 死刑及ヒ無期刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒテ五年間監視ニ付ス  
第四十條 監視ノ期限ハ主刑ノ終リタル日ヨリ起算ス主刑ノ期滿免除ヲ得タル時ハ其捕ニ就キ  
タル日ヨリ起算ス

若シ主刑ヲ免シテ止テ監視ニ付シタル時ハ其裁判確定ノ日ヨリ起算ス

第四十一條 監視ニ付セラレタル者其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ假ニ監視ヲ免スルコトヲ得

第四十二條 附加ノ罰金ハ之ヲ宣告ス若シ一月内ニ納完セサル時ハ第二十七條ノ例ニ照シ輕禁  
錮ニ換ヘ主刑滿限ノ後之ヲ執行ス

第四十三條 左ニ記載シタル物件ハ宣告シテ官ニ沒收ス但法律規則ニ於テ別ニ沒收ノ例ヲ定メ  
タルハ各法律規則ニ從フ

一 法律ニ於テ禁制シタル物件

二 犯罪ノ用ニ供シタル物件

五

刑法



六

三犯罪ニ因テ得タル物件

第四十四條 法律ニ於テ禁制シタル物件ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收ス犯罪ノ用ニ供シ及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ犯人ノ所有ニ係リ又ハ所有主ナキ時ノ外之ヲ沒收スルヲ得ス

第四十五條 刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人ニ科ス但其費用ノ額ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四十六條 犯人刑ニ處セラレ又ハ放免セラル、ト雖モ被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ免カル、トヲ得ズ

第四十七條 數人共犯ニ係ル裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ其犯人ヲシテ之ヲ連帶セシム

第四十八條 裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ被害者ノ請求ニ因リ刑事裁判所ニ於テ之ヲ審判スルヲ得若シ贓物犯人ノ手ニアル時ハ請求ナシト雖モ直チニ之ヲ被害者ニ還付ス

第五節 刑期計算  
第四十九條 刑期ヲ計算スルニ一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

受刑ノ初日ハ時間ヲ論セズ一日ニ算入シ放免ノ日ハ刑期ニ算入セズ

第五十條 刑ハ裁判確定シタル後ニ非サレハ之ヲ執行スルヲ得ス

第五十一條 刑期ハ刑名宣告ノ日ヨリ起算ス若シ上訴ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ從フ  
一犯人自ラ上訴シテ其上訴正當ナル時ハ前判宣告ノ日ヨリ起算ス若シ其上訴不當ナル時ハ後判宣告ノ日ヨリ起算ス

二檢察官ノ上訴ニ係ル者ハ其上訴正當ナルト否トヲ分タス前判宣告ノ日ヨリ起算ス  
三上訴中保釋ヲ得又ハ責付セラレタル者ハ其日數ヲ刑期ニ算入スルヲ得ス

第五十二條 刑期限内逃走シ再ヒ捕ニ就キタル者ハ其逃走ノ日數ヲ除キ前後受刑ノ日ヲ計算ス

第六節 假出獄

第五十三條 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者獄則ヲ遵守シ悔改ノ狀アル時ハ其刑期四分ノ三ヲ經過スルノ後行政ノ處分ヲ以テ假ニ出獄ヲ許スヲ得

無期徒刑ノ囚ハ十五年ヲ經過スルノ後亦同シ

流刑ノ囚ハ第二十一條ニ照シ幽閉ヲ免スルノ外假出獄ノ例ヲ用ヒス

第五十四條 徒刑ノ囚ハ假出獄ヲ許サル、ト雖モ仍ホ島地ニ住居セシム

第五十五條 假出獄ヲ許サレタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルヲ得但本刑期限内特別ニ定メタル監視ニ付ス

第五十六條 假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入スルヲ得

第五十七條 刑期限内更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ假出獄ヲ許サス

第七節 期滿免除  
第五十八條 刑ヲ執行ヲ遅レタル者法律ニ定メタル期限ヲ經過スルニ因テ期滿免除ヲ得

第五十九條 主刑ハ左ノ年限ニ從テ期滿免除ヲ得  
一死刑ハ三十年  
二無期徒刑ハ二十五年  
三有期徒刑ハ二十年  
四重懲役重禁獄ハ十五年  
五輕懲役輕禁獄ハ十年  
六禁錮罰金ハ七年  
七拘留料ハ一年

第六十條 剝奪公權停止公權及ヒ監視ハ期滿免除ヲ得

附加ノ罰金ハ主刑ト共ニ期滿免除ヲ得

沒收ハ五年ヲ經テ期滿免除ヲ得但禁制物ハ期滿免除ノ限ニ在ラズ

刑法

七



第六十一條 期滿免除ハ刑ノ執行ヲ遁レタル日ヨリ起算ス若シ捕ニ就キ再ヒ逃走シタル時ハ其逃走ノ日ヨリ起算シ關刑裁判ニ係ル時ハ其宣告ノ日ヨリ起算ス  
第六十二條 刑ノ執行ヲ遁レタル者ニ對シ逮捕ヲ命シタル時ハ最終ノ令狀ヲ出シタル日ヨリ期滿免除ヲ起算ス

第八節 復権

第六十三條 公權ヲ剝奪セラレタル者ハ主刑ノ終リタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後其情狀ニ因リ將來ノ公權ヲ復スルコトヲ得

主刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ監視ニ付シタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後亦同シ

第六十四條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ直ニ復権ヲ得特赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ赦狀中記載スルニ非レハ復権ヲ得ス

赦ニ因テ復権ヲ得タル者ハ自ら監視ヲ免シタル者トス

第六十五條 復権ハ勅裁ニ非レハ之ヲ得可ラス

第三章 加減例

第六十六條 法律ニ於テ刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ後ノ數條ニ記載シタル例ニ照シテ加減ス但加

ヘテ死刑ニ入ルコトヲ得ス

第六十七條 重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑

二無期徒刑

三有期徒刑

四重懲役

五輕懲役

第六十八條 國事ニ關スル重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑

二無期徒刑

三有期徒刑

四重禁獄

五輕禁獄

第六十九條 輕懲役ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ重禁獄ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

輕禁獄ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ輕禁獄ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

第七十條 禁錮罰金ニ該ル者減輕ス可キ時ハ各本條ニ記載シタル刑期金額ノ四分ノ一ヲ減スルヲ以テ一等ト爲シ其加重ス可キ時ハ亦四分ノ一ヲ加フルヲ以テ一等ト爲ス

輕罪ノ刑ハ加ヘテ重罪ニ入ルコトヲ得ス但禁錮ハ加ヘテ七年ニ至ルコトヲ得

第七十一條 禁錮ヲ減盡シタル時ハ拘留ニ處シ罰金ヲ減盡シタル時ハ科料ニ處ス禁錮罰金ヲ減シテ其短期十日以下算數一圓九十五錢以下ニ及フ時ハ亦拘留科料ニ處スルコトヲ得

第七十二條 拘留科料ニ該ル者加減ス可キ時ハ禁錮罰金ノ例ニ照シ其四分ノ一ヲ加スルヲ以テ一等ト爲ス

一 等ト爲ス

逃警罪ノ刑ハ加ヘテ輕罪ニ入ルコトヲ得ス但拘留ハ加ヘテ十二日ニ至ルコトヲ得減シテ一日以下ニ降スコトヲ得ス科料ハ加ヘテ二圓四十錢ニ至ルコトヲ得減シテ五錢以下ニ降スコトヲ得ス

第七十三條 禁錮拘留ヲ加減スルニ因テ其期限ニ算數ヲ生シ一日ニ滿サル時ハ之ヲ除棄ス

第七十四條 附加ノ罰金ハ主刑ニ從テ加減シ其金額ノ四分ノ四ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス若シ減盡シタル時ハ止メ主刑ヲ科ス

第四章 不論罪及ヒ減輕

第一節 不論罪及ヒ減輕

第七十五條 抗拒ス可カラザル強制ニ遇ヒ其意ニ非サルノ所爲ハ其罪ヲ論ヒス

天災又ハ意外ノ變ニ因リ避リ丁カラザル危難ニ遇ヒ自己若シハ親屬ノ身體ヲ防衛スルニ出タ



ル所爲亦同シ

第七十六條 本屬長官ノ命令ニ從ヒ其職務ヲ以テ爲シタル者ハ其罪ヲ論セス  
第七十七條 罪ヲ犯ス意ナキノ所爲ハ其罪ヲ論セス但法律規則ニ於テ別ニ罪ヲ定メタル者ハ此  
限ニ在ラス

罪ト爲ル可キ事實ヲ知ラズシテ犯シタル者ハ其罪ヲ論セス

罪本重カル可クシテ犯ス時知ラサル者ハ其重キニ從テ論スルコトヲ得ス

第七十八條 罪ヲ犯ス時知覺精神ノ喪失ニ因テ是非ヲ辨別セサル者ハ其罪ヲ論セス  
第七十九條 罪ヲ犯ス時十二歳ニ滿ル者ハ其罪ヲ論セス但滿八歳以上ノ者ハ情狀ニ因リ滿十  
六歳ニ過キザル時間之ヲ懲治場ニ留置スルコトヲ得

第八十條 罪ヲ犯ス時滿十二歳以上十六歳ニ滿ル者ハ其所爲是非ヲ辨別シタルト否トヲ審察  
辨別ナリシテ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ滿二十歳ニ過キザル時間之ヲ懲治場ニ  
留置スルコトヲ得

若シ辨別アリテ犯シタル時ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ二等ヲ減ス

第八十一條 罪ヲ犯ス時滿十六歳以上二十歳ニ滿ル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス  
第八十二條 瘡腫者罪ヲ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ五年ニ過キザル時間之ヲ懲治  
場ニ留置スルコトヲ得

第八十三條 違警罪ハ滿十六歳以上二十歳ニ滿ル時ト雖モ其罪ヲ宥恕スルコトヲ得ス  
滿十二歳以上十六歳ニ滿ル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス十二歳ニ滿ル者及ヒ瘡  
腫者ハ其罪ヲ論セス

第八十四條 此節ニ記載スルノ外特別ノ不論罪宥恕減輕ハ各本條ニ於テ之ヲ記載ス

第二節 自首減輕

第八十五條 罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ニ一等ヲ減ス但謀殺

故殺ニ係ル者ハ自首減輕ノ限ニテラス

第八十六條 財産ニ對スル罪ヲ犯シタル者自首シテ其贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シタル時ハ自首  
減輕ノ外仍ホ本刑ニ二等ヲ減ス其全部ヲ還償セスト雖モ半數以上ヲ還償シタル時ハ一等ヲ減  
ス

第八十七條 財産ニ對スル罪ヲ犯シ被害者ニ首服シタル者ハ官ニ自首スルト同ク前二條ノ例ニ  
照シテ處斷ス

第八十八條 此節ニ記載スルノ外本條別ニ自首ノ例ヲ掲ケタル者ハ各其本條ニ從フ

第三節 酌量減輕

第八十九條 重罪輕罪違警罪ヲ分タス所犯情狀原諒ス可キ者ハ酌量シテ本刑ヲ減輕スルコトヲ得  
法律ニ於テ本刑ヲ加重シ又ハ減輕ス可キ者ト雖モ其酌量ス可キ時ハ仍ホ之ヲ減輕スルコトヲ得

第九十條 酌量減輕ス可キ者ハ本刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第五章 再犯加重

第九十一條 先ニ重罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯輕罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ  
第九十二條 先ニ輕罪重罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯輕罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ  
第九十三條 先ニ違警罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯違警罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ但一年  
内再ヒ其違警罪裁判所ノ管轄地内ニ於テ犯シタル時ニ非ハレハ再犯ヲ以テ論スルコトヲ得ス

第九十四條 再犯加重ハ初犯ノ裁判確定ノ後ニ非ハレハ之ヲ論スルコトヲ得ス  
第九十五條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯スニ因リ刑ヲ宣告シタル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行  
シ定役ニ服セザル者ヲ後ニス若シ初犯再犯共ニ定役ニ服スル刑ニ該ル時又ハ共ニ定役ニ服セ  
ザル刑ニ該ル時ハ先ツ其重キ者ヲ執行ス

罰金科料ニ該ル者ハ順序ニ拘ハラス各之ヲ徵收ス

第九十六條 陸海軍裁判所ニ於テ判決ヲ經タル者再ヒ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ初犯ノ非常律ニ  
從ヒ處斷シタル者ニ非ハレハ再犯ヲ以テ論スルコトヲ得



第九十七條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ再ヒ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論スルコト得ス

第九十八條 三犯以上ノ者ト雖モ其加重ノ法ハ再犯ノ例ニ同シ

第六章 加減順序

第九十九條 犯罪ノ情狀ニ因リ總則ニ照シ同時ニ本刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ左ノ順序ニ從テ其刑名ヲ定ム但從犯及ヒ未遂犯罪ノ減等其他各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕ハ其加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス

一再犯加重

二宥恕減輕

三自首減輕

四酌量減輕

第七章 數罪俱發

第一百條 重罪輕罪ヲ犯シ未タ判決ヲ經テ二罪以上俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從テ處斷ス  
重罪ノ刑ハ刑期ノ長キ者ヲ以テ重ト爲シ刑期ノ等シキ者ハ定役アル者ヲ以テ重ト爲ス  
輕罪ノ刑ハ其所犯情狀最重キ者ニ從テ處斷ス

第一百一條 違警罪二罪以上俱ニ發シタル時ハ各其刑ヲ科ス若シ重罪又ハ輕罪ト俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從テ

第一百二條 一罪前ニ發シ己ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ其輕ク若シハ等シキ者ハ之ヲ論セス其重キ者ハ更ニ之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算ス但前發ノ刑罰金料ニ該リ已ニ納完シタル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ折算シテ後發ノ刑期ニ通算ス

若シ前發ノ罪ヲ判決スル時未タ發セサル罪再犯ノ罪ト俱ニ發シタル者ハ其再犯ト比較シ一ノ重キニ從ヒ前發ノ刑ヲ通算セス  
第一百三條 數罪俱ニ發シ一ノ重キニ從フ時ト雖モ其沒收及ヒ徵償ノ處分ハ各本法ニ從フ

第八章 數人共犯

第一節 正犯

第一百四條 二人以上現ニ罪ヲ犯シタル者ハ皆正犯ト爲シ各自ニ其刑ヲ科ス

第一百五條 人ヲ教唆シテ重罪輕罪ヲ犯サシメタル者ハ亦正犯ト爲ス

第一百六條 正犯ノ身分ニ因リ別ニ刑ヲ加重ス可キ時ハ他ノ正犯從犯及ヒ教唆者ニ及ホスコト得ス

第一百七條 犯人ノ多數ニ因リ刑ヲ加重ス可キ時ハ教唆者ヲ算入シテ多數ト爲スコト得ス

第一百八條 專ヲ指定シテ犯罪ヲ教唆スルニ當リ犯人教唆ニ乘シ其指定シタル以外ノ罪ヲ犯シ又ハ其現ニ行フ所ノ方法教唆者ノ指示シタル所ト殊ナル時ハ左ノ例ニ照シテ教唆者ヲ處斷ス

一所犯教唆シタル罪ヨリ重キ時ハ止テ其指定シタル罪ニ從テ刑ヲ科ス

二所犯教唆シタル罪ヨリ輕キ時ハ現ニ行フ所ノ罪ニ從テ刑ヲ科ス

第二節 從犯

第一百九條 重罪輕罪ヲ犯スコトヲ知テ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示シ其他豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ

幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタル者ハ從犯ト爲シ正犯ノ刑ニ一等ヲ減ス但正犯現ニ行フ所ノ罪

從犯ノ知ル所ヨリ重キ時ハ止テ其知ル所ノ罪ニ照シ一等ヲ減ス

第一百十條 身分ニ因リ刑ヲ加重ス可キ者從犯ト爲ル時ハ其重キニ從テ一等ヲ減ス

正犯ノ身分ニ因リ刑ヲ減輕ス可キ時ト雖モ從犯ノ刑ハ其輕キニ從テ減免スルコト得ス

第九章 未遂犯罪

第一百十一條 罪ヲ犯サントシテ謀リ又ハ其豫備ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル者ハ本條別ニ刑

名ヲ記載スルニ非サレハ其刑ヲ科セス

第一百十二條 罪ヲ犯サントシテ已ニ其事ヲ行フト雖モ犯人意外ノ障礙若シハ舛錯ニ因リ未タ遂

ケサル時ハ已ニ遂ケタル者ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第一百十三條 重罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス

輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ本條別ニ記載スルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス

刑法



ルヲ得ス

違警罪ヲ犯サン、シテ未タ遂ケサル者ハ其罪ヲ論セス

第十章 親屬例

第百十四條 此刑法ニ於テ親屬ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

一 祖父母父母夫妻

二 子孫及ヒ其配偶者

三 兄弟姉妹及ヒ其配偶者

四 兄弟姉妹ノ子及ヒ其配偶者

五 父母ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者

六 父母ノ兄弟姉妹ノ子

七 配偶者ノ祖父母父母

八 配偶者ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者

九 配偶者ノ兄弟姉妹ノ子

十 配偶者ノ父母ノ兄弟姉妹

第百十五條 祖父母ト稱スルハ高曾祖父母外祖父母同シ父母ト稱スルハ繼父母嫡母同シ子孫ト

稱スルハ庶子曾玄孫外孫同シ兄弟姉妹ト稱スルハ異父異母ノ兄弟姉妹同シ

養子其養家ニ於テ親屬ノ例ハ實子ニ同シ

第二編 公益ニ關スル重罪輕罪

第一章 皇室ニ對スル罪

第百十六條 天皇皇后皇太子ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑ニ處ス

第百十七條 天皇皇后皇太子ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ三月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十

圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

皇陵ニ對シ不敬ノ所爲アル者亦同シ

第百十八條 皇族ニ對シ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ處ス其危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第百十九條 皇族ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以

下ノ罰金ヲ附加ス

第百二十條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第二章 國事ニ關スル罪

第一節 内亂ニ關スル罪

第百二十一條 政府ヲ顛覆シ又ハ邦土ヲ僭稱シ其他朝憲ヲ紊亂スルヲ目的ト爲シ内亂ヲ起シ

タル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 首魁及ヒ教唆者ハ死刑ニ處ス

二 群衆ノ指揮ヲ爲シ其他樞要ノ職務ヲ爲シタル者ハ無期徒刑ニ處シ其情輕キ者ハ有期流刑ニ

處ス

三 兵器金穀ヲ資給シ又ハ諸般ノ職務ヲ爲シタル者ハ重禁錮ニ處シ其情輕キ者ハ輕禁錮ニ處ス

四 教唆ニ乘リテ附和隨行シ又ハ指揮ヲ受ケテ雜役ニ供シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮

ニ處ス

第百二十二條 内亂ヲ起スノ目的ヲ以テ兵器彈藥船舶金穀其他軍備ノ物品ヲ劫掠シタル者ハ已

ニ内亂ヲ起シタル者ノ刑ニ同シ

第百二十三條 政府ヲ變亂スルノ目的ヲ以テ人々謀殺シタル者ハ兵ヲ擧ルニ至ラスト雖モ内亂

ト同シ論シ其教唆者及ヒ下手者ヲ死刑ニ處ス

第百二十四條 前三條ノ罪ハ未遂犯罪ノ時ニ於テ乃チ本刑ヲ科ス

第百二十五條 兵隊ヲ招募シ又ハ兵器金穀ヲ準備シ其他内亂ノ豫備ヲ爲シタル者ハ第百二十一

條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

内亂ノ陰謀ヲ爲シ未タ豫備ニ至ラサル者ハ各二等ヲ減ス

刑法



第二百二十六條 内亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲ト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

第二百二十七條 内亂ノ情ヲ知テ犯人ニ集會所ヲ給與シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二節 外患ニ關スル罪

第二百二十九條 外國ニ與シテ本國ニ抗敵シ又ハ外國ト交戰中同盟國ニ抗敵シ其他本國ニ背叛シテ敵兵ニ附屬シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百三十條 交戰中敵兵ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ本國及ヒ同盟國ノ都府城塞又ハ兵器彈藥船艦其他軍事ニ關スル土地家屋物件ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百三十一條 本國及ヒ同盟國ノ軍情機密ヲ敵國ニ漏泄シ若クハ兵隊屯集ノ要地又ハ道路ノ險夷ヲ敵國ニ通知シタル者ハ無期流刑ニ處ス

第二百三十二條 陸海軍ヨリ委任ヲ受テ物品ヲ供給シ及ヒ工作ヲ爲ス者交戰ノ際敵國ニ通謀シ又ハ其路遺ヲ收受シテ命令ニ違背シ軍備ノ缺乏ヲ致シタル時ハ有期流刑ニ處ス

第二百三十三條 外國ニ對シ私ニ戰端ヲ開キタル者ハ有期流刑ニ處ス其豫備ニ止ル者ハ一等又ハ二等ヲ減ス

第二百三十四條 外國交戰ノ際本國ニ於テ局外中立ヲ布告シタル時其布告ニ違背シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十五條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三章 靜謐ヲ害スル罪

第一節 兇徒聚衆ノ罪

第三百三十六條 兇徒多衆ヲ嘯聚シテ暴動ヲ謀リ官吏ノ説諭ヲ受クルト雖モ仍モ解散セサル者首魁及ヒ教唆者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス附和隨行シタル者ハ二圓以上五圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百三十七條 兇徒多衆ヲ嘯聚シテ官廳ニ喧鬧シ官吏ニ強逼シ又ハ村市ヲ騷擾シ其他暴動ヲ爲シタル者首魁及ヒ教唆者ハ重懲役ニ處ス其嘯聚ニ應シ煽動シテ勢ヲ助ケタル者ハ輕懲役ニ處シ其情輕キ者ハ一等ヲ減ス附和隨行シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百三十八條 暴動ノ際人ヲ殺死シ若クハ家屋船舶倉庫等ヲ燒燬シタル時ハ現ニ手ヲ下シ及ヒ火ヲ放ツ者ヲ死刑ニ處ス

第二節 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

第三百三十九條 官吏ノ職務ヲ以テ法律規則ヲ執行シ又ハ行政司法官署ノ命令ヲ執行スルニ當リ暴行脅迫ヲ以テ其官吏ニ抗拒シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ官吏ヲ毆傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第三百四十一條 官吏ノ職務ニ對シ其目前ニ於テ形容若クハ言語ヲ以テ侮辱シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三節 囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

第三百四十二條 已決ノ囚徒逃走シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

刑法



第四百三十三條 已決ノ囚徒逃走ノ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論セス其刑期限内再ヒ逃走シタル者ハ再犯ヲ以テ論ス

第四百三十四條 未決ノ囚徒入監中逃走シタル者ハ第四百三十二條ノ例ニ同シ但原犯ノ罪ヲ判決スル時ニ於テ數罪俱發ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百三十五條 囚徒三人以上通謀シテ逃走シタル時ハ第四百三十二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第四百三十六條 囚徒ヲ逃走セシムル爲メ兇器其地ノ器具ヲ給與シ又ハ逃走ノ方法ヲ指示シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス因テ囚徒ノ逃走ヲ致セタル時ハ一等ヲ加フ

第四百三十七條 囚徒ヲ劫奪シ又ハ暴行脅迫ヲ以テ囚徒ノ逃走ヲ助ケタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ輕懲役ニ處ス

第四百三十八條 囚徒ヲ看守シ又ハ護送スル者囚徒ヲ逃走セシメタル時ハ亦前條ノ例ニ同シ

第四百三十九條 前條ニ記載セタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケタル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百四十條 看守又ハ護送者其懈怠ニ因リ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル時ハ二圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百四十一條 犯罪人又ハ逃走ノ囚徒及ヒ監視ニ付セラレタル者ナルトテ知テ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメタル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第四百四十二條 他人ノ罪ヲ免カレンメントテ圖リ其罪證ト爲ル可キ物件ヲ隱蔽シタル者ハ十一

日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百四十三條 前二條ノ罪ヲ犯シタル者犯人ノ親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第四百四十四條 附加刑ヲ執行ヲ遁ルノ罪

第四百四十五條 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者私ニ其權ヲ行ヒタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百四十六條 監視ニ付セラレタル者其規則ニ違背シタル時ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第四百四十七條 前二條ノ罪ハ其刑期限内再ヒ犯シタル時ニ非カレハ再犯ヲ以テ論スルコトヲ得ズ

第四百四十八條 私ニ軍用ノ銃砲彈藥ヲ製造シ及ビ所有スル罪

第四百四十九條 官名ヲ受ケ又ハ官許ヲ得スシテ陸海軍ノ用ニ供スル銃砲彈藥其他破裂質ノ物品ヲ製造シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其之ヲ輸入シタル者亦同シ

前項ノ物品ヲ私ニ販賣シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百五十條 前條ノ罪ヲ犯スト雖モ職工又ハ雇人ニシテ止テ正犯ノ使令ニ供シタルハ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第四百五十一條 前二條ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケタル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百五十二條 第四百四十七條ニ記載シタル物品ヲ私ニ所有シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百五十三條 第四百五十七條ニ記載シタル物品ノ製造ニ供シタル器械ニシテ單ニ其用ニ供ス可キ者ハ何人ノ所有ヲ問ハズ之ヲ沒収ス

第四百五十四條 往來通信ヲ妨害スル罪

第四百五十五條 道路橋梁河溝港埠ヲ損壞シテ往來ヲ妨害シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮

第九十

刑法



ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第六十三條 偽計又ハ威力ヲ以テ郵便ヲ妨害シ若クハ之ヲ阻止シタル者ハ亦前條ニ同シ  
 第六十四條 電信ノ器械柱木ヲ損壞シ又ハ條線ヲ切斷シテ電氣ヲ不通ニ致シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 若シ器械柱木條線ヲ損壞シテ電信ノ妨害ヲ爲スト雖モ不通ニ至ラサル時ハ一等ヲ減ス  
 第六十五條 瀕車ノ往來ヲ妨害スル爲メ鐵道及ヒ其標識ヲ損壞シ其他危險ナル障礙ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス  
 第六十六條 船舶ノ往來ヲ妨害スル爲メ燈臺浮標其他航海ノ安寧ヲ保護スル標識ヲ損壞シ又ハ詐偽ノ標識ヲ點示シタル者ハ亦前條ニ同シ  
 第六十七條 前數條ニ記載シタル罪具事務ニ關スル官吏及ヒ雇人職工自ラ犯シタル時ハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ  
 第六十八條 第六十二條ノ罪ヲ犯シテ人ヲ殺傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス  
 第六十九條 第六十五條第六十六條ノ罪ヲ犯シテ瀕車ヲ顛覆シ又ハ船舶ヲ覆没シタル時ハ無期徒刑ニ處シ人ヲ死ニ致シタル時ハ死刑ニ處ス  
 第七十條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス  
 第七節 人ノ住所ヲ侵ス罪  
 第七十一條 晝間故ナシ人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス  
 若シ左ニ記載シタル所爲アル時ハ一等ヲ加フ  
 一門戶牆壁ヲ踰越損壞シ又ハ鎖鑰ヲ開キテ入りタル時  
 二兇器其他犯罪ノ用ニ供ス可キ物品ヲ携帶シテ入りタル時  
 三暴行ヲ爲シテ入りタル時  
 四二人以上ニテ入りタル時  
 第七十二條 夜間故ナシ人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス  
 若シ前條ニ記載シタル加重ス可キ所爲アル時ハ一等ヲ加フ  
 第七十三條 故ナシ皇居禁苑離宮行在所及ヒ皇陵内ニ入りタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ  
 第八節 官ノ封印ヲ破棄スル罪  
 第七十四條 官署ノ處分ニ因リ特別ニ家屋倉庫其他ノ物件ニ施シタル封印ヲ破棄シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス  
 若シ看守者自ラ犯シタル時ハ一等ヲ加フ  
 第七十五條 官ノ封印ヲ破棄シテ其物件ヲ盜取シ又ハ毀壞シタル者ハ盜罪及ヒ毀壞ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス  
 第七十六條 看守者其懈怠ニ因リ封印ヲ破棄シ又ハ其物件ヲ盜取毀壞スル犯人アルコトヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス  
 第九節 公務ヲ行フヲ拒ム罪  
 第七十七條 陸海軍ノ將校タル者出兵ヲ要求スル權アル官署ヨリ其要求ヲ受ケ故ナクシテ之ヲ肯ヒサル時ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第七十八條 陸海軍ノ徵兵ニ編入セラレ可キ者身體ヲ毀傷シテ疾病ヲ作爲シ其他詐偽ノ所爲ヲ以テ免役ヲ圖リタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 若シ他人ニ囑託シ其氏名ヲ詐稱シテ徵募ニ應ゼシメタル者亦同シ其囑託ヲ受ケテ徵募ニ應ゼタル者ハ第二百三十一條ノ例ニ照シテ處斷ス

刑法



第七十九條 醫師化學家其他職業ニ因リ官署ヨリ解剖分析又ハ鑑定ヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十條 裁判所ヨリ證人トシテ證據ヲ陳述スルコトヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ亦前條ニ同シ

第八十一條 傳染病流行ノ際又ハ傳染病ノ疑アル船舶入港スルニ當リ醫師其病患ヲ検査シ又ハ消滅ノ方法ヲ陳述スルコトヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

獸類傳染病流行ノ際獸醫此條ノ罪ヲ犯シタル時ハ一等ヲ減ス

第四章 信用ヲ害スル罪

第一節 貨幣ヲ偽造スル罪

第八十二條 內國通用ノ金銀貨及ヒ紙幣ヲ偽造シテ行使シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第八十三條 內國ニ於テ通用スル外國ノ金銀貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第八十四條 官許ヲ得テ發行スル銀行ノ紙幣ヲ偽造シ若クハ變造シテ行使シタル者ハ内外國ノ區別ニ從ヒ前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第八十五條 內國通用ノ銅貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第八十六條 前數條ニ記載シタル貨幣ノ偽造變造已ニ成テ未タ行使セサル者ハ各本刑ニ照シ一等ヲ減シ其未タ成ラサル者ハ二等ヲ減ス

若シ偽造ノ器械ヲ豫備シテ未タ着手セサル者ハ各三等ヲ減ス

第八十七條 貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ雇ヲ受ケタル職工ハ前數條ニ記載シタル犯人ノ受ク可キ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ職工ノ補助ヲ爲シテ雜役ニ供シタル者ハ職工ノ刑ニ照シ一等又ハ二等ヲ減ス

第八十八條 貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者ハ偽造變造ノ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第八十九條 偽造變造ノ貨幣ヲ內國ニ輸入シタル者ハ偽造變造ノ刑ニ同シ

第九十條 偽造變造ノ情ヲ知テ其貨幣ヲ收受シ之ヲ行使シタル者ハ偽造變造シテ行使シタル者ノ刑ニ照シ各二等ヲ減ス

其未タ行使セサル者ハ各三等ヲ減ス

第九十一條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第九十二條 貨幣ヲ偽造變造シ及ヒ輸入收受シタル者未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

若シ職工雜役及ヒ房屋ヲ給與シタル者未タ行使セサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第九十三條 貨幣ヲ收受スルノ後ニ於テ偽造又ハ變造ナルコトヲ知リ之ヲ行使シタル者ハ其價額ニ倍ノ罰金ニ處ス但シ其罰金ハ二圓以下ニ降スコトヲ得ス

第九十四條 官印ヲ偽造スル罪

第九十五條 御璽國璽ヲ偽造シ又ハ其偽璽ヲ使用シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第九十六條 各官署ノ印ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ重懲役ニ處ス

第九十七條 產物商品等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ輕懲役ニ處ス

書翰什物等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第九十七條 御璽國璽官印記號印章ノ影贖ヲ盜用シタル者ハ前數條ニ記載シタル偽造ノ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

刑法



若シ監守者自ラ犯シタル時ハ偽造ノ刑ニ同シ

第九十八條 官ニシテ發行シタル各種ノ印紙界紙及ヒ郵便切手ヲ偽造變造シ又ハ其情ヲ知テ之ヲ

使用シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第九十九條 已ニ貼用シタル各種ノ印紙及ヒ郵便切手ヲ再ヒ貼用シタル者ハ二圓以上二十圓

以下ノ罰金ニ處ス

第二百條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷

ス

第二百一條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節 官ノ文書ヲ偽造スル罪

第二百二條 詔書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

其詔書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百三條 官ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其官ノ文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百四條 公債證書地券其他官吏ノ公證シタル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者

ハ輕懲役ニ處ス

若シ無記名ノ公債證書ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第二百五條 官吏其管掌ニ係ル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ前二條ノ例ニ照

レ各一等ヲ加フ

其文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百六條 官ノ文書ヲ偽造スルコト因テ官印ヲ偽造シ又ハ盜用シタル者ハ偽造官印ノ各本條ニ

照シ重キニ從テ處斷ス

第二百七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ

監視ニ付ス

第四節 私印私書ヲ偽造スル罪

第二百八條 他人ノ私印ヲ偽造シテ使用シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上

五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ他人ノ印影ヲ盜用シタル者ハ一等ヲ減ス

第二百九條 爲替手形其他裏書ヲ以テ賣買ス可キ證書若シハ金額ト交換ス可キ約定手ヲ偽造

シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其手形證書ニ詐偽ノ裏書ヲ爲シテ行使シタル者亦同シ

第二百十條 賣買貸借贈遺交換其他權利義務ニ關スル證書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタ

ル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四十圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其餘ノ私書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ一年以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓

以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百十一條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ

處斷ス

第二百十二條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付

ス

第五節 免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ偽造スル罪

第二百十三條 官ノ免狀又ハ鑑札ヲ偽造シテ行使シタル者ハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ

四十圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官印ヲ偽造シ又ハ盜用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ

照シテ處斷ス

第二百十四條 屬籍身分氏名ヲ詐稱シ其他詐偽ノ所爲ヲ以テ免狀鑑札ヲ受ケタル者ハ十五日以

上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

官吏情ヲ知テ其免狀鑑札ヲ下付シタル者ハ一等ヲ加フ

第二百十五條 公務ヲ免カル可キ爲メ醫師ノ氏名ヲ用ヒ疾病ノ證書ヲ偽造シテ行使シタル者ハ

刑法



自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニシルヲ分タス一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

醫師囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル者ハ一等ヲ加フ  
第二百十六條 陸海軍ノ徵兵ヲ免カル可キ爲メ疾病ノ證書ヲ偽造シテ行使シタル者及ヒ囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル醫師ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百十七條 免狀鑑札及ヒ疾病ノ證書ヲ増減變換シテ行使シタル者ハ亦偽造ノ刑ニ同シ

第六節 偽證ノ罪

第二百十八條 刑事ニ關スル證人トシテ裁判所ニ呼出サレタル者被告人ヲ曲庇スル爲メ事實ヲ掩蔽シテ偽證ヲ爲シタル時ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一重罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二輕罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三違警罪ノ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ違警罪ノ本條ニ依テ處斷ス

第二百十九條 偽證ノ爲メ被告人正當ノ刑ヲ免カレタル時ハ偽證者ノ刑前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百二十條 被告人ヲ陷害スル爲メ偽證ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一重罪ニ陥ラシムル爲メ偽證シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二輕罪ニ陥ラシムル爲メ偽證シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三違警罪ニ陥ラシムル爲メ偽證シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十一條 偽證ノ爲メ被告人刑ニ處セラレタル後ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ偽證者ヲ其刑ニ反坐ス若シ反坐ノ刑前條ニ記載シタル偽證ノ刑ヨリ輕キ時ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス

其刑期限内ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ現ニ經過シタル日數ニ照シテ反坐ノ刑期ヲ減スルヲ得但減シテ前條偽證ノ刑ヨリ降スヲ得ズ

第二百二十二條 偽證ノ爲メ被告人死刑ニ處セラレタル時ハ反坐ノ刑一等ヲ減ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ二等ヲ減ス

若シ被告人ヲ死ニ陥ルノ目的ヲ以テ偽證ヲ爲シタル時ハ死刑ニ反坐ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ一等ヲ減ス

第二百二十三條 民事商事又ハ行政裁判ニ關シテ偽證ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十四條 鑑定又ハ通事ノ爲メ裁判所ニ呼出サレタル者詐僞ノ陳述ヲ爲シタル時ハ前數條ニ記載シタル偽證ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百二十五條 賄賂其他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ偽證又ハ詐僞ノ鑑定通事ヲ爲サシメタル者ハ亦偽證ノ例ニ同シ

第二百二十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者其事件ノ裁判宣告ニ至ラサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第七節 度量衡ヲ偽造スル罪

第二百二十七條 度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シテ販賣シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ盜用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百二十八條 偽造變造ノ情ヲ知テ其度量衡ヲ販賣シタル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ減ス

第二百二十九條 商賈農工定規ヲ増減シタル度量衡ヲ所有シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁

刑法



錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
若シ其度量衡ヲ使用シテ利ヲ得タル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス  
第二百三十條 人ノ囑託ヲ受ケテ度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シタル者ハ其囑託シタル犯人ノ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

第八節 身分ヲ詐稱スル罪

第二百三十一條 官署ニ對シ文書又ハ言語ヲ以テ其屬籍身分氏名年齢職業ヲ詐稱シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十二條 官職位階ヲ詐稱シ又ハ官ノ服飾徽章若クハ内外國ノ勳章ヲ僭用シタル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第九節 公選ノ投票ヲ偽造スル罪

第二百三十三條 公選ノ投票ヲ偽造シ又ハ其數ヲ増減シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十四條 賄賂ヲ以テ投票ヲ爲サシメ又ハ賄賂ヲ受ケテ投票ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十五條 投票ヲ檢査シ及ヒ其數ヲ計算スル者其投票ヲ偽造シ又ハ増減シタル時ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十六條 調書ヲ造リ投票ノ結局ヲ報告スル者其數ヲ増減シ其他詐偽ノ所爲アル時ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五章 健康ヲ害スル罪

第一節 阿片烟ニ關スル罪

第二百三十七條 阿片烟ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第二百三十八條 阿片烟ヲ吸食スルノ器具ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第二百三十九條 稅關官吏情ヲ知テ阿片烟及ヒ其器具ヲ輸入セシメタル者ハ前二條ノ刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百四十條 阿片烟ヲ吸食スル爲メ房屋ヲ給與シテ利ヲ圖ル者ハ輕懲役ニ處ス  
人ヲ引誘シテ阿片烟ヲ吸食セシメタル者亦同シ

第二百四十一條 阿片烟ヲ吸食シタル者ハ二年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百四十二條 阿片烟及ヒ吸食ノ器具ヲ所有シ又ハ受寄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二節 飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪

第二百四十三條 人ノ飲料ニ供スル淨水ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルト能ハサルニ至ラシメタル者ハ十一月以上一月ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十四條 人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ用ヒテ水質ヲ變シ又ハ腐敗セシメタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十五條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ歐打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三節 傳染病豫防規則ニ關スル罪

第二百四十六條 傳染病豫防ノ爲メ設ケタル規則ニ違背シテ入港ノ船舶ヨリ上陸シ又ハ物品ヲ陸地ニ運搬シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十七條 船長自ラ前條ノ罪ヲ犯シ又ハ人ノ犯スルヲ知テ制セサル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ加フ

第二百四十八條 傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ流行地方ヨリ他處ニ出タル者ハ十五日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十九條 獸類ノ傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ獸類ヲ他處ニ出シタル者ハ十一日

刑法



以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四節 危害品及ヒ健康ヲ害スヘキ物品製造ノ規則ニ關スル罪

第二百五十條 官許ヲ得スシテ危害ヲ生スヘキ物品ノ製造ヲ創設シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ健康ヲ害ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十一條 官許ヲ得テ前條ニ記載シタル製造所ヲ創設スト雖モ危害ヲ豫防シ健康ヲ保護スル規則ニ違背シタル時ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第二百五十二條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第五節 健康ヲ害ス可キ飲食物及藥劑ヲ販賣スル罪

第二百五十三條 人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ飲食物ニ混和シテ販賣シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十四條 規則ニ違背シテ毒藥劇藥ヲ販賣シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十五條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六節 私ニ醫業ヲ爲ス罪

第二百五十六條 官許ヲ得スシテ醫業ヲ爲シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十七條 前條ノ犯人治療ノ方法ヲ誤リ因テ人ヲ死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六章 風俗ヲ害スル罪

第二百五十八條 公然毀壞ノ所行ヲ爲シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十九條 風俗ヲ害スル冊子圖書其他猥褻ノ物品ヲ公然陳列シ又ハ販賣シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百六十條 賭場ヲ開張シテ利ヲ圖リ又ハ博徒ヲ招結シタル者ハ三月以上一年以上以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十一條 財物ヲ賭シテ現ニ博奕ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者亦同シ但飲食物ヲ賭スル者ハ此限ニアラス

賭博ノ器具財物其現場ニ在ル者ハ之ヲ沒收ス

第二百六十二條 財物ヲ醜集シ富籤ヲ以テ利益ヲ僥倖スルノ業ヲ興行シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十三條 神祠佛堂墓所其他禮拜所ニ對シ公然不敬ノ所爲アル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ説教又ハ禮拜ヲ妨害シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七章 死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪

第二百六十四條 埋葬ヲ可キ死屍ヲ毀棄シタル者ハ一月以上一年以上以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十五條 墳墓ヲ發掘シテ棺槨又ハ死屍ヲ見ハシタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ死屍ヲ毀棄シタル者ハ三月以上三年以上以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十六條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケザル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第八章 商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪

第二百六十七條 偽計又ハ威力ヲ以テ毀壞其他衆人ノ需用ニ缺ク可カラザル食用物ノ賣買ヲ妨害シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス



前項ニ記載シタル以外ノ物品ノ賣買ヲ妨害シタル者ハ一等ヲ減ス  
 第二百六十八條 偽計又ハ威力ヲ以テ糶賣又ハ入札ヲ妨害シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百六十九條 偽計又ハ威力ヲ以テ農工ノ業ヲ妨害シタル者ハ亦前條ニ同シ  
 第二百七十條 農工ノ雇人其雇賃ヲ増サシメ又ハ農工業ノ景況ヲ變セシムル爲メ雇主及ヒ他ノ雇人ニ對シ偽計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百七十一條 雇主其雇賃ヲ減シ又ハ農工業ノ景況ヲ變スル爲メ雇人及ヒ他ノ雇主ニ對シ偽計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ亦前條ニ同シ  
 第二百七十二條 虛偽ノ風説ヲ流布シテ穀類其他衆人需用物品ノ價直ヲ昂低セシメタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス  
 第九章 官吏濫職ノ罪  
 第一節 官吏公益ヲ害スル罪  
 第二百七十三條 官吏其管掌ニ係ル法律規則ヲ公布施行セズ又ハ他ノ官吏ノ公布施行ヲ妨害シタル者ハ二月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百七十四條 兵隊ヲ要求シ及ヒ之ヲ使用スル權アル官吏地方ノ騷擾其他兵權ヲ以テ鎮撫ス可キ時ニ當リ其處分ヲ爲サ、ル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百七十五條 官吏規則ニ違背シテ商業ヲ爲シタル者ハ二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス  
 第二節 官吏人民ニ對スル罪  
 第二百七十六條 官吏擅ニ威權ヲ用ヒ人ヲシテ其權利ナキ事ヲ行ハシメ又ハ其爲ス可キ權利ヲ妨害シタル者ハ十一月以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百七十七條 人ノ身體財産ヲ妨害スルノ犯人アルニ當リ豫審判事檢察官更其報告ヲ受

シテ速ニ保護ノ處分ヲ爲サ、ル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 第二百七十八條 逮捕官吏法律ニ定メタル程式規則ヲ遵守セズシテ人ヲ逮捕シ又ハ不正ニ人ヲ監禁シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過クル者ハ一等ヲ加フ  
 第二百七十九條 司獄官吏程式規則ヲ遵守セズシテ囚人ヲ監禁シ若クハ囚人ヲ出獄セシム可キノ時ニ至リ之ヲ放免セザル者ハ亦前條ノ例ニ同シ  
 第二百八十條 前二條ニ記載シタル官吏又ハ護送者囚人ニ對シ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所ヲ爲シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 囚人囚人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス  
 第二百八十一條 水火震災ノ際官吏囚人ノ監禁ヲ解シテ忘リ因テ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加フ  
 第二百八十二條 裁判官檢察官及ヒ警察官吏被告人ニ對シ罪狀ヲ陳述セシムル爲メ暴行ヲ加ヘ又ハ陵虐ノ所爲アル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 囚人被告人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス  
 第二百八十三條 裁判官檢察官故ナクシテ刑事ノ訴ヲ受理ヒズ又ハ遷延シテ審理セザル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 其民事ノ訴ニ係ル者亦同シ  
 第二百八十四條 官吏人ノ囑託ヲ受ケ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 囚人不正ノ處分ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ  
 第二百八十五條 裁判官民事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
 刑法



因テ不正ノ裁判ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ

第二百八十六條 裁判官檢察官警察官吏刑事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ被告人ヲ曲庇シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其被告人ヲ陷害シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス若シ枉斷シタル所ノ刑此刑ヨリ重キ時ハ第二百二十一條第二百二十二條ノ例ニ照シテ反坐ス

第二百八十七條 裁判官檢察官警察官吏賄賂ヲ收受聽許セスト雖モ情ニ徇カヒ又ハ怨ヲ挾キ被被告人ヲ曲庇陷害シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十八條 前數條ニ記載シタル賄賂已ニ收受シタル者ハ之ヲ沒收シ費用シタル者ハ其價ヲ追徴ス

第三節 官吏財産ニ對スル罪

第二百八十九條 官吏自ラ監守スル所ノ金銀物件ヲ竊取シタル者ハ輕懲役ニ處ス

因テ官ノ文書簿冊ヲ増減變換シ又ハ毀棄シタル時ハ第二百五條ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百九十條 租稅其他諸般ノ入額ヲ徵收スル官吏正數外ノ金數ヲ徵收シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百九十一條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪

第一章 身體ニ對スル罪

第一節 謀殺故殺ノ罪

第二百九十二條 豫メ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪ト爲シ死刑ニ處ス

第二百九十三條 毒物ヲ施用シテ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ヲ以テ論シ死刑ニ處ス

第二百九十四條 故意ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ故殺ノ罪ト爲シ無期徒刑ニ處ス

第二百九十五條 支解折割其他慘刻ノ所爲ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十六條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カル、爲メ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十七條 人ヲ殺スノ意ニ出テ詐稱誘導シテ危害ニ陷レ死ニ致シタル者ハ故殺ヲ以テ論シ其豫メ謀テ者ハ謀殺ヲ以テ論ス

第二百九十八條 謀殺故殺ヲ行ヒ誤テ他人ヲ殺シタル者ハ仍ホ謀殺故殺ヲ以テ論ス

第二百九十九條 人ヲ毆打創傷シ因テ死ニ致シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百條 人ヲ毆打創傷シ其兩目ヲ瞎シ兩耳ヲ聾シ又ハ兩肢ヲ折リ及ヒ舌ヲ斷テ陰陽ヲ毀敗シ若シハ知覺精神ヲ喪失セシメ篤疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其一目ヲ瞎シ一耳ヲ聾シ又ハ一肢ヲ折リ其他身體ヲ殘廢シ癩疾ニ致シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百一條 人ヲ毆打創傷シ二十日以上ノ時間疾病ニ罹リ又ハ職業ヲ營ムコト能ハサルニ至ラシ

ノタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

其疾病休業ノ時間二十日ニ至ラサル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

疾病休業ニ至ラスト雖モ身體ニ創傷ヲ成シタル者ハ十一月以上一月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百二條 豫メ謀テ人ヲ毆打創傷シ休業癩疾又ハ死ニ致シタル者ハ前數條ニ記載シタル刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第三百三條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カル、爲メ人ヲ毆打創傷シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百四條 毆打ニ因リ誤テ他人ヲ創傷シタル者ハ仍ホ毆打創傷ノ本刑ヲ科ス



第三百五條 二人以上共ニ人ヲ毆打創傷シタル者ハ現ニ手ヲ下シ傷ヲ成スノ輕重ニ從テ各自ニ其刑ヲ科ス若シ共毆シテ傷ヲ成スノ輕重ヲ知ルコト能ハサル時ハ其重傷ノ刑ニ照シ一等ヲ減ス但教唆者ハ減等ノ限ニ在ラス

第三百六條 二人以上共ニ人ヲ毆打スルニ當リ自ラ人ヲ傷セスト雖モ幫助シテ傷ヲ成サシメタル者ハ現ニ傷ヲ成シタル者ノ刑ニ一等ヲ減ス

第三百七條 健康ヲ害ス可キ物品ヲ施用シテ人ヲ疾苦セシメタル者ハ豫メ謀テ毆打創傷スルノ例ニ照シテ處斷ス

第三百八條 人ヲ殺スノ意ニ非スト雖モ詐稱誘導シテ危害ニ陷レ因テ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ヲ以テ論ス

第三節 殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不諭罪

第三百九條 自己ノ身體ニ暴行ヲ受クルニ因リ直チニ怒リ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十條 毆打シテ互ニ創傷シ其手ヲ下スノ先後ヲ知ルコト能ハサル者ハ各其罪ヲ宥恕スルヲ得

第三百十一條 本夫其妻ノ姦通ヲ覺知シ姦所ニ於テ直チニ姦夫又ハ姦婦ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十二條 姦間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若クハ門戸牆壁ヲ踰越損壞セントスル者ヲ防止スル爲メ之ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス

第三百十三條 前數條ニ記載シタル宥恕ス可キ罪ハ各本刑ニ照シ二等又ハ三等ヲ減ス

第三百十四條 身體生命ヲ正當ニ防衛シ己ムコトヲ得サルニ出テ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ自己ノ爲メヨシ他人ノ爲メニスルヲ分タス其罪ヲ論セス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十五條 左ノ諸件ニ於テ己ムコトヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ論セス

一 財産ニ對シ放火其他暴行ヲ爲ス者ヲ防止スルニ出タル時

二 盜犯ヲ防止シ又ハ盜賊ヲ取還スルニ出タル時

三 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若クハ門戸牆壁ヲ踰越損壞スル者ヲ防止スルニ出タル時

第三百十六條 身體財産ヲ防衛スルニ出ルト雖モ己ムコトヲ得サルニ非テ害ヲ暴行人ニ加ヘ又ハ危害已ニ去リタル後ニ於テ勢ニ乘シ仍ホ害ヲ暴行人ニ加ヘタル者ハ不諭罪ノ限ニ在ラス但情狀ニ因リ第三百十三條ノ例ニ照シ其罪ヲ宥恕スルコトヲ得

第四節 過失殺傷ノ罪

第三百十七條 疎虞懈怠又ハ規則慣習ヲ遵守セス過失ニ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十八條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ癱瘓疾ニ致シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十九條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ疾病休業ニ至ラシメタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五節 自殺ニ關スル罪

第三百二十條 人ヲ教唆シテ自殺セシメ又ハ囑託ヲ受ケテ自殺人ノ爲メコトヲ下シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其他自殺ノ補助ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

第三百二十一條 自己ノ利ヲ圖リ人ヲ教唆シテ自殺セシメタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百二十二條 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪

第三百二十三條 擅ニ人ヲ逮捕シ又ハ私家ニ監禁シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過ルル毎コト一等ヲ加フ

第三百二十四條 擅ニ人ヲ監禁制縛シテ毆打拷責シ又ハ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス



第三百二十四條 前條ノ罪ヲ犯シテ人ヲ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス  
第三百二十五條 擅ニ人ヲ監禁シ水火震災ノ際其監禁ヲ解クコトヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第七節 脅迫ノ罪

第三百二十六條 人ヲ殺サント脅迫シ又ハ人ノ住居シタル家屋ニ放火セント脅迫シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
毆打創傷其他暴行ヲ加ヘント脅迫シ又ハ財産ニ放火シ及ヒ毀壞劫掠セント脅迫シタル者ハ十日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
第三百二十七條 兇器ヲ持テ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ  
第三百二十八條 親屬ニ害ヲ加フ可キ事ヲ以テ脅迫シタル者ハ亦前二條ノ例ニ同シ  
第三百二十九條 此節ニ記載シタル罪ハ脅迫ヲ受ケタル者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第八節 墮胎ノ罪

第三百三十條 懷胎ノ婦女藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス  
第三百三十一條 藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎セシメタル者ハ亦前條ニ同シ因テ婦女ヲ死ニ致シタル者ハ一年以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十二條 醫師穩婆又ハ藥商前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ  
第三百三十三條 懷胎ノ婦女ヲ威逼シ又ハ誑騙シテ墮胎セシメタル者ハ一年以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十四條 懷胎ノ婦女ナルコトヲ知テ毆打其他暴行ヲ加ヘテ墮胎ニ至ラシメタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス其墮胎セシムルノ意ニ出タル者ハ輕懲役ニ處ス  
第三百三十五條 前二條ノ罪ヲ犯シテ因テ婦女ヲ癱瘓疾又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第九節 幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪

第三百三十六條 八歳ニ滿サル幼者ヲ遺棄シタル者ハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス  
自ラ生活スルコト能ハサル老疾者ヲ遺棄シタル者亦同シ  
第三百三十七條 八歳ニ滿サル幼者又ハ老疾者ヲ監關無人ノ地ニ遺棄シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十八條 給料ヲ得テ人ノ寄託ヲ受ケ保養ス可キ者前二條ノ罪ヲ犯シタル時ハ各一等ヲ加フ  
第三百三十九條 幼者老疾者ヲ遺棄シテ因テ廢疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ重懲役ニ處シ死ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第三百四十條 自己ノ所有地又ハ看守ス可キ地内ニ遺棄セラレタル幼者老疾者アルコトヲ知テ之ヲ扶助セヌ又ハ官署ニ申告セサル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス  
若シ疾病ニ罹リ昏倒スル者アルコトヲ知テ扶助セヌ又ハ申告セサル者亦同シ

第十節 幼者ヲ略取誘拐スル罪

第三百四十一條 十二歳ニ滿サル幼者ヲ略取シ又ハ誘拐シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス  
第三百四十二條 十二歳以上二十歳ニ滿サル幼者ヲ略取シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其誘拐シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十三條 略取誘拐シタル幼者ナルコトヲ知テ自己ノ家屬僕婢ト爲シ又ハ其他ノ名稱ヲ以テ之ヲ收受シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス  
第三百四十四條 前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但略取誘



拐セラルル幼者式ニ從テ婚姻ヲ爲シタル時ハ告訴ノ效ナシ  
第三百四十五條 二十歳ニ滿サル幼者ヲ略取誘拐シテ外國人ニ交付シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第十一節 猥褻姦淫重婚ノ罪

第三百四十六條 十二歳ニ滿サル男女ニ對シ猥褻ノ所行ヲ爲シ又ハ十二歳以上ノ男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十七條 十二歳ニ滿サル男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十八條 十二歳以上ノ婦女ヲ強姦シタル者ハ輕懲役ニ處ス

藥酒等ヲ用ヒ人ヲ昏睡セシメ又ハ精神ヲ錯亂セシメテ姦淫シタル者ハ強姦ヲ以テ論ス

第三百四十九條 十二歳ニ滿サル幼者ヲ姦淫シタル者ハ輕懲役ニ處ス若シ強姦シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百五十條 前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第三百五十一條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス但強姦ニ因テ癩癘疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第三百五十二條 十六歳ニ滿サル男女ノ淫行ヲ勸誘シテ媒合シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百五十三條 有夫ノ婦姦通シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其相姦スル者亦同シ

此條ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ告訴ノ效ナシ

第三百五十四條 配偶者アル者重テ婚姻ヲ爲シタル時ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十二節 誣告及ヒ誹毀ノ罪

第三百五十五條 不實ノ事ヲ以テ人ヲ誣告シタル者ハ第二百二十條ニ記載シタル偽證ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百五十六條 誣告ヲ爲スト雖モ被告人ノ推問ヲ始メサル前ニ於テ誣告者自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第三百五十七條 誣告ニ因テ被告人刑ニ處セラレタル時ハ第二百二十一條第二百二十二條ニ記載シタル例ニ照シテ處斷ス

第三百五十八條 惡事觸行ヲ摘發シテ人ヲ誹毀シタル者ハ事實ノ有無ヲ問ハズ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一公然ノ演說ヲ以テ人ヲ誹毀シタル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二書類畫圖ヲ公布シ又ハ雜劇偶像ヲ作爲シテ人ヲ誹毀シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百五十九條 死者ヲ誹毀シタル者ハ誣罔ニ出タルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルヲ得ス

第三百六十條 醫師藥商總藝又ハ代言人辯護人代書人若クハ神官僧侶其身分職業ニ於テ委託ヲ受ケタル事ニ因リ知得タル陰私ヲ漏告シタル者ハ誹毀ヲ以テ論シ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但裁判所ノ呼出ヲ受ケテ事實ヲ陳述スル者ハ此限ニ在ラズ

第三百六十一條 此節ニ記載シタル誹毀ノ罪ハ被害者又ハ死者ノ親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第三百六十二條 祖父母父母ニ對スル罪

第三百六十二條 子孫其祖父母父母ヲ謀殺故殺シタル者ハ死刑ニ處ス



第三百六十三條 子孫其祖父母父母ニ對シテ毆打創傷ノ罪其他監禁脅迫遺棄惡告誹毀ノ罪ヲ犯シタル者ハ各本條ニ記載シタル凡人ノ刑ニ照シテ等ヲ加フ但癡疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百六十四條 子孫其祖父母父母ニ對シテ衣食ヲ供給セズ其他必要ナル奉養ヲ缺キタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百六十五條 祖父母父母ニ對シタル殺傷ノ罪ハ特別ノ宥恕及ヒ不論罪ノ例ヲ用フルヲ得ス但其犯ス時知ラサル者ハ此限ニ在ラス

第二章 財産ニ對スル罪

第一節 竊盜ノ罪

第三百六十六條 人ノ所有物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百六十七條 水火震災其他ノ變ニ乘リテ竊盜ヲ犯シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百六十八條 門戶牆壁ヲ踰越損壞シ若クハ鎖鑰ヲ開キ邸宅倉庫ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百六十九條 二人以上共ニ前三條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百七十條 兇器ヲ携帶シテ人ノ住居シタル邸宅ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第三百七十一條 自己ノ所有物ト雖モ其物トシテ他人ニ交付シ又ハ官署ノ命令ニ因リ他人ノ看守シタル時之ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第三百七十二條 田野ニ於テ穀類菜葉其他ノ產物ヲ竊取シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百七十三條 山林ニ於テ竹木礦物其他ノ產物ヲ竊取シ又ハ川澤池沼湖海ニ於テ人ノ生養シ

若クハ營業ニ關スル產物ヲ竊取シタル者ハ又前條ニ同シ

第三百七十四條 牧場ニ於テ牧畜ノ獸類ヲ竊取シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百七十五條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百七十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三百七十七條 祖父母父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姉妹互ニ其財物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論スルノ限ニ在ラス

若シ他人共ニ犯シテ財物ヲ分チタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第二節 強盜ノ罪

第三百七十八條 人ヲ脅迫シ又ハ銀行ヲ加ヘテ財物ヲ強取シタル者ハ強盜ノ罪ト爲シ輕懲役ニ處ス

第三百七十九條 強盜左ニ記載シタル情狀アル者ハ一個毎ニ一等ヲ加フ

一 二人以上共ニ犯シタル時

二 兇器ヲ携帶シテ犯シタル時

第三百八十條 強盜人ヲ傷シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百八十一條 強盜婦女ヲ強姦シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第三百八十二條 竊盜財ヲ得テ其取還ヲ拒ク爲メ臨時暴行脅迫ヲ爲シタル者ハ強盜ヲ以テ論ス

第三百八十三條 啤酒等ヲ用ヒ人ヲ酔迷セシメ其財物ヲ盜取シタル者ハ強盜ヲ以テ論シ輕懲役ニ處ス

第三百八十四條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪

刑法



第三百八十五條 遺失及ヒ漂流ノ物品ヲ拾得テ隱匿ノ所有主ニ還付セズ又ハ官署ニ申告セサル者ハ十一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百八十六條 他人ノ所有地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得テ隱匿シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百八十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論ゼス

第四節 家資分散ニ關スル罪

第三百八十八條 家資分散ノ際其財產ヲ藏匿脱漏シ又ハ虛偽ノ負債ヲ增加シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百八十九條 家資分散ノ際其財產ノ類ヲ藏匿毀棄シ若クハ分散決定ノ後債主中ノ一人又ハ數人ニ其負債ヲ私償シテ他ノ債主ヲ害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百九十條 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

第三百九十一條 二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ增減變換シタル者ハ偽造ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三百九十二條 詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十三條 他人ノ動産ノ不慮ノ買取シ又ハ交換スルニ當リ其物質ヲ變シ若クハ分量ヲ偽テ人ニ交付シ

第三百九十四條 前條ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監禁ニ付ス

第三百九十五條 受寄ノ財物借用物又ハ典物其他委託ヲ受ケタル金銀物件ヲ費消シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス若シ騙取携帶其他詐欺ノ所爲アル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十六條 自己ノ所有ニ係ルト雖モ官署ヨリ差押ヘタル物件ヲ藏匿脱漏シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス但家資分散ノ際此罪ヲ犯シタル者ハ第三百八十八條ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百九十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百九十八條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論ゼス

第六節 贓物ニ關スル罪

第三百九十九條 強盜竊ノ贓物ナルコトヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百條 前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監禁ニ付ス

第四百一條 詐欺取財其他ノ犯罪ニ關シタル物件ナルコトヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ十一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百二條 火ヲ放テ人ノ住居シタル家屋ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

第四百三條 火ヲ放テ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ燒燬シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第四百四條 火ヲ放テ廢屋及柴草肥料等ヲ貯ル屋舎ヲ燒燬シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百五條 火ヲ放テ人ヲ乘載シタル船舶瀛車ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

第四百六條 其人ヲ乘載セサル船舶瀛車ニ係ル時ハ重懲役ニ處ス

刑法



者ハ輕懲役ニ處ス

第四百七條 火ヲ放テ自己ノ家屋ヲ燒燬シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第四百八條 放火ノ罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四百九條 火ヲ失シテ人ノ家屋財產ヲ燒燬シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十條 火藥其他激發ス可キ物品又ハ煤氣并蒸氣罐ヲ破裂セシメテ人ノ家屋財產ヲ毀壞シタル者ハ其故意ニ出ルト過失トヲ分テ放火失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第八節 決水ノ罪

第四百十一條 堤防ヲ決潰シ又ハ水閘ヲ毀壞シテ人ノ住居シタル家屋ヲ漂失シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

若シ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ漂失シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百十二條 堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シテ田圃礦坑牧場等ヲ荒廢シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第四百十三條 他人ノ便益ヲ損シ又ハ自己ノ便益ヲ圖ル爲メ堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シ其他水利ヲ妨害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百十四條 過失ニ因テ水害ヲ起シタル者ハ失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第九節 船舶ヲ覆没スル罪

第四百十五條 衝突其他ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載シタル船舶ヲ覆没シタル者ハ死刑ニ處ス但船中死亡ナキ時ハ無期徒刑ニ處ス

第四百十六條 前條ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載セサル船舶ヲ覆没シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

第四百十七條 人ノ家屋其他ノ建造物ヲ毀壞シタル者ハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第四百十八條 人ノ家屋ニ屬スル牆壁及ヒ園池ノ裝飾又ハ田圃ノ樊圍牧場ノ柵欄ヲ毀壞シタル者ハ十一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十九條 人ノ稼積竹木其他需用ノ植物ヲ毀損シタル者ハ十一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百二十條 土地ノ境界ヲ表シタル物件ヲ毀壞シ又ハ移轉シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百二十一條 人ノ器物ヲ毀壞シタル者ハ十一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百二十二條 人ノ牛馬ヲ殺シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百二十三條 前條ニ記載シタル以外ノ家畜ヲ殺シタル者ハ二圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス但被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第四百二十四條 人ノ權利義務ニ關スル証書類ヲ毀棄滅盡シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四編 違警罪

第四百二十五條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

一規則ヲ遵守セシメシテ火藥其他破裂ス可キ物品ヲ市街ニ運搬シタル者

二規則ヲ遵守セシメシテ火藥其他破裂ス可キ物品又ハ自ラ火ヲ發ス可キ物品ヲ貯藏シタル者

三官許ヲ得シテ煙火ヲ製造シ又ハ販賣シタル者

四八家稠密ノ場所ニ於テ煙火ヲ燃シ又ハ他火器ヲ玩ヒタル者

五蒸氣器械其他煙筒火竈ヲ建造修理シ及ヒ掃除スル規則ニ違背シタル者

六官署ノ督促ヲ受ケテ崩壞セントスル家屋牆壁ノ修理ヲ爲サ、ル者

七官許ヲ得シテ死屍ヲ解剖シタル者



八自己ノ所有地内ニ死屍アルヲ知テ官署ニ申告セズ又ハ他所ニ移シタル者

九八ノ毆打シテ創傷疾病ニ至ラサル者

十密ニ賣淫ヲ爲シ又ハ其媒合容止ヲ爲シタル者

▲參着 明治十四年十二月九日第六十四號布告

密賣淫ノ儀ハ刑法第四百二十五條第十項ニ明文有之候ヘトモ當分ノ内其取締懲罰ハ従前ノ通

東京ハ警視廳其他ハ地方官ニ委任ス

十一人ノ住居セサル家屋内ニ潛伏シタル者

十二定リタル住居ナク平常營生ノ産業ナクシテ諸方ニ徘徊スル者

十三官許ノ墓地外ニ於テ私ニ埋葬シタル者

十四違警罪ノ犯人ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者但被告人偽證ノ爲メ刑ヲ免カレタル時ハ第二

百十九條ノ例ニ從フ

第四百二十六條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ二日以上五日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五十錢以上一圓

五十錢以下ノ科料ニ處ス

一 人家ノ近傍又ハ山林田野ニ於テ濫リニ火ヲ燒ク者

二 水火其他ノ變ニ際シ官署ヨリ防禦ス可キノ求メテ受テ傍觀セテ之ヲ肯セサル者

三 不熟ノ糞物又ハ腐敗シタル飲食物ヲ販賣シタル者

四 健康ヲ保護スル爲メ設ケタル規則又ハ傳染病豫防規則ニ違背シタル者

五 人ノ通行ス可キ場所ニアル危險ノ井溝其他四所ニ蓋又ハ防圍ヲ爲ササル者

六 路上ニ於テ犬其他ノ獸類ヲ嘯シ又ハ糞逸セシムル者

七 狂人ノ看守ヲ怠リ路上ニ徘徊セシムル者

八 狂犬猛獸等ノ繫鎖ヲ怠リ路上ニ放テタル者

九 糞尿ノ檢視ヲ受テ以テ之ヲ埋葬シタル者

十 糞尿及他路生ノ糞物ヲ掃損シ又ハ汚穢シタル者

一 濫リニ車馬ヲ疾驅シテ行人ノ防害ヲ爲シタル者

二 制止ヲ肯セズシテ人ノ群集シタル場所ニ車馬ヲ牽キタル者

三 夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者

四 木石等ヲ道路ニ堆積シテ防圍ヲ設ケズ又ハ標識ノ點燈ヲ怠リタル者

五 瓦礫ヲ道路家屋圍圍ニ投擲シタル者

六 禽獸ノ死屍ヲ道路ニ棄擲シ又ハ取除ガサル者

七 汚穢物ヲ道路家屋圍圍ニ投擲シタル者

八 警察ノ規則ニ違背シテ工商ノ業ヲ爲シタル者

九 醫即糞糞事故ナクシテ急病人ノ招キニ應ヒサル者

十 死亡ノ申告ヲ爲サズシテ埋葬シタル者

十一 流音浮説ヲ爲シテ人ヲ誑惑シタル者

十二 妄ニ吉凶禍福ヲ説キ又ハ禱祈符呪等ヲ爲シ人ヲ惑ハシテ利ヲ圖ル者

十三 私有地外ニ濫リニ家屋牆壁ヲ設ケ又ハ軒楹ヲ出シタル者

十四 官許ノ得スルテ路傍又ハ河岸ニ床店等ヲ開キタル者

十五 路上ノ植木市街ノ常燈及ヒ厠場等ヲ毀損シタル者

十六 道路橋梁其他ノ場所ニ榜示シタル通行禁止及ヒ指道標ノ類ヲ毀棄汚損シタル者

第四百二十八條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日ノ拘留ニ處シ又ハ十錢以上一圓以下ノ科料ニ處

ス

一 官署ニ價額ヲ定メタル物品ヲ定價以上ニ販賣シタル者

刑法



- 二渡船橋梁其他ノ場所ニ於テ定價以上ノ通行錢ヲ取リ又ハ故ナク通行ヲ妨ケタル者
- 三渡船橋梁其他通行錢ヲ拂フ可キ場所ニ於テ其定價ヲ出サズシテ通行シタル者
- 四路上ニ於テ賭博ニ類スル商業ヲ爲シタル者
- 五官許ヲ得ズシテ劇場其他觀物場ヲ開キ及ヒ其規則ニ違背シタル者
- 六溝渠下水ヲ毀損シ又ハ官署ノ督促ヲ受ケテ溝渠下水ヲ浚ハサル者
- 七制止ヲ肯セズシテ路傍ニ食物其他ノ商品ヲ羅列シタル者
- 八官許ヲ得ズシテ獸類ヲ官有地ニ放シ又ハ牧畜シタル者
- 九身體ニ刺文ヲ爲シ及ヒ之ヲ業トスル者
- 十他人ノ繫キタル牛馬其他ノ獸類ヲ解放シタル者
- 十一他人ノ繫キタル舟筏ヲ解放シタル者

第四百二十九條

- 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス
- 一橋梁又ハ堤防ノ害ト爲ル可キ場所ニ舟筏ヲ繫キタル者
  - 二牛馬諸車其他物件ヲ道路ニ横タヘ又ハ木石薪炭等ヲ堆積シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
  - 三車馬ヲ並ヘ牽テ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
  - 四水路ニ於テ舟ヲ並ヘ通船ノ妨害ヲ爲シタル者
  - 五氷雪塵芥等ヲ路上ニ投擲シタル者
  - 六官署ノ督促ヲ受ケテ道路ノ掃除ヲ爲ササル者
  - 七制止ヲ肯セズシテ路上ニ遊戯ヲ爲シ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
  - 八牛馬ヲ牽キ又ハ繫クテ忽カセシテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
  - 九出入ヲ禁止シタル場所ニ濫リニ出入シタル者
  - 十通行禁止ノ榜示ヲ犯シテ通行シタル者
  - 十一道路ニ於テ放歌高聲ヲ發シテ制止ヲ肯セサル者
  - 十二酩酊シテ路上ニ喧噪シ又ハ醉臥シタル者

十三路上ノ常燈ヲ消シタル者

- 十四人家ノ牆壁ニ貼紙及ヒ樂書シタル者
  - 十五邸宅ノ番號標札招牌又ハ貸家賣家ノ貼紙其他報告ノ榜標等ヲ毀損シタル者
  - 十六他人ノ田野園圃ニ於テ菜葉ヲ採食シ又ハ花卉ヲ採折シタル者
  - 十七公園ノ規則ヲ犯シタル者
  - 十八通路チヤ他人ノ田圃ヲ通行シ又ハ牛馬ヲ牽入レタル者
- 第四百三十條 前數條ニ記載スルノ外各地方ノ便宜ニヨリ定ムル所ノ違警罪ヲ犯シタル者ハ其罰則ニ從テ處斷ス



第六拾七號

刑法附則別冊ノ通相定メ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

右奉 勅旨布告候事

明治十四年十二月十九日

大藏大臣三條實美  
司法卿 大木喬任

刑法附則



刑法附則目錄

第一章 主刑執行

第二章 監視

第三章 假出獄及特別監視

第四章 刑事裁判費用

第五章 賠償處分

刑法附則

第一章 主刑執行

第一條 死刑ハ其執行ヲ爲ス裁判所ノ檢察官書記及ヒ獄司刑場ニ立會獄司ヨリ四人ニ死刑ヲ執行ス可キヲ告示シタル後獄丁ヲシテ之ヲ執行セシム但其期限ハ午前十時前トス

第二條 死刑ヲ行フ時ハ刑場ノ警服ヲ嚴ニシ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルヲ許サス但立會官吏ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第三條 死刑ノ執行畢リタル時ハ書記其始末書ヲ作り立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印シ之ヲ裁判所ノ檢事局ニ納ム可シ

第四條 左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フヲ禁ス

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

仁孝天皇祭

神武天皇祭

六月大祓

秋季皇靈祭

神宮神嘗祭

天長節

後桃園天皇祭

新嘗祭

光格天皇祭

十二月大祓

刑法附則



第五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懐胎ト申スル者ハ醫師及ヒ穩婆ヲシテ之ヲ検査セシメ果シテ懐胎ナシト時ハ檢察官ヨリ司法卿ニ上申シテ其執行ヲ停メ産後一百日ヲ經テ更ニ司法卿ノ命令ヲ受ケ執行スヘシ

第六條 死刑ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者アル時ハ獄司之ヲ許可シ下付スルヲ得

第七條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル者執行ニ至ルマテ何時ニテモ獄司ノ許可ヲ得テ其親屬故舊ニ接見スルヲ得

第八條 死刑ヲ執行シタル時ハ犯人ノ屬籍氏名年齢職業住所及ヒ罪狀刑名ヲ記載シテ左ノ各所ニ榜示公告ス可シ

刑ヲ宣告シタル裁判所ノ門前  
犯人住居ノ地

第九條 徒流ノ囚ヲ發遣スルハ裁判ヲ爲シタル地ノ獄司ヨリ内務卿ニ上申シ其命令ヲ待テ發給ノ地ニ護送ス可シ

第十條 徒刑ノ囚ハ嶋地ニ於テ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルヲ得

第十一條 流刑ノ囚幽閉中獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ獄司之ヲ許ス可シ

第十二條 流刑ノ囚幽閉ヲ免ス可キ者アル時ハ獄司ヨリ内務司法兩卿ニ上申シ其許可ヲ受ク可シ

第十三條 徒刑ノ囚假出獄ヲ許サレタル者又ハ流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者家屬ヲ招キ同居スルヲ請フ時ハ之ヲ許ス可シ得但シ其路費ハ自ラ之ヲ辨ス可シ

第十四條 流刑ノ囚幽閉ヲ免シテ居住セシムル者ハ監獄近傍ノ地ヲ限リ獄司ノ監督ヲ受ケシム若シ已ムト得サル事故アル時ハ獄司ニ請フテ限外ニ出ルヲ得

第十五條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者再ヒ罪ヲ犯シタル時ハ本刑期限内ト雖モ島地ニ於テ直チニ其刑ヲ執行ス可シ

第十六條 懲役重禁錮ノ囚ハ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルヲ得

第十七條 禁錮輕禁錮ノ囚獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ獄司之ヲ許ス可シ

第十八條 服役限内更ニ罪ヲ犯シ再ヒ定役ニ服スル者後犯ノ刑期百日以内ハ工錢ヲ給與セス

第十九條 囚人ニ給與スル工錢ノ額ヲ定メ之ヲ交付シ及ヒ領置スル方法ハ監獄ノ規則ニ從フ

第二十條 罰金料ノ宣告ヲ受ケ未ダ納完セサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ之ヲ徵收セス附加ノ罰金ニ於ル亦同シ

第二章 監視

第二十一條 監視ハ主刑ノ終リタル後仍ハ將來ヲ檢束スル爲メ警察官吏ヲシテ犯人ノ行狀ヲ監視セシム者トス

第二十二條 監視ニ付ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ主刑ノ終リタル時獄司ヨリ犯人ヲ其住居ノ地ノ警察所ニ護送シ監視ヲ執行セシム主刑ノ期滿免除ヲ得タル者又ハ主刑ヲ免シ止テ監視ニ付スル者ハ其裁判所ノ檢察官ヨリ警察所ニ護送ス可シ

第二十三條 犯人ヲ警察所ニ護送スル時ハ其監視ノ起算滿期ヲ記載シタル文書及ヒ刑名宣告書ノ原本ヲ附ス可シ

第二十四條 犯人ノ住居遠地ニ在テ一日程ヲ過クル者ハ獄司若クハ檢察官ヨリ先ツ最近ノ警察所ニ護送シ其警察所ヨリ住居ノ地ノ警察所ニ送致ス可シ

第二十五條 警察所ヨリ犯人ヲ住居ノ地ノ警察所ニ送致スル時ハ其里程ヲ計リ日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與シ犯人到着ノ日直チニ之ヲ其地ノ警察所ニ差出サシム但途中事故アリテ淹滞シタル時ハ第三十一條ノ例ニ從フ可シ

犯人ヲ送致スル時ハ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ其地ノ警察所ニ護送ス可シ

第二十六條 犯人住居ノ地ノ警察所ニ於テハ監視ノ期間間遵守ス可キ條件ヲ請問カセ監視ノ票ヲ下付ス可シ



第二十七條 監視ニ付セラレタル者ハ其期限間左ノ條件ヲ遵守ス可シ

一 毎月二度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ但疾病又ハ己ムコトヲ得ル事故アリテ警察所ニ到ルコト能ハサル時ハ其事由ヲ届出ツ可シ

二 酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルコトヲ許サス

三 事故アリテ其住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

四 擅ニ他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許サス若シ己ムコトヲ得サル事故アル時ハ其事由ヲ警察所ニ具申シ許可ヲ受ク可シ

第二十八條 監視ノ期限間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルコトアル可シ

第二十九條 警察所ニ於テ住居ヲ轉スルコトヲ許可シタル時ハ其事由ヲ轉住ノ地ノ警察所ニ通知シ

第三十條 他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許可シタル時ハ其里程ヲ計リ先方ノ地ニ滞留スル時日ヲ算シ往復日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與ス可シ

犯人先方ノ地ニ到レハ其地ノ警察所ニ出テ旅券ヲ示シ官吏ノ認印ヲ受ケ限定ノ日數内ニ歸來シ直チニ旅券ヲ警察所ニ還納ス可シ

第三十一條 旅行中天災又ハ疾病等ニ因リ臨時滯留シタル時ハ事由ヲ其地ノ警察所ニ具申シ官吏ノ證書ヲ受ケ歸着ノ日旅券ニ添ヘ警察所ニ差出ス可シ

第三十二條 監視ニ付スル者住居ヲ及ヒ引取人ナキ時ハ其期限間懲治場ニ留置シ工業ヲ爲サシメ又ハ他役ニ供メ住居遠地ニ在テ歸着スル資力ナキ者亦同シ

第三十三條 懲治場ニ留置シタル者限内引取人ヲ得又ハ住居ノ地ニ歸着スル資力ヲ得タル時ハ其地ニ送致シテ殘期ノ監視ヲ執行セシム可シ

第三十四條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯シ初犯再犯共ニ監視ニ付ス可キ時又ハ監視ノ期限間再ヒ罪ヲ犯シ更ニ監視ニ付ス可キ時ハ並ニ主刑滿限ノ後前後ノ期限ヲ通算シテ監視ヲ執行ス可シ

第三十五條 罰金ヲ禁錮ニ換ヘタル監視ニ付ス可キ時ハ其禁錮ノ日數ヲ監視ノ期限ニ算入ス可シ

第三十六條 監視ニ付セラレタル者其規則ヲ遵守シ悞改ノ狀アル時ハ警察官ヨリ其事實ヲ上申シ内務司法兩卿ノ命ヲ受ケテ假ニ監視ヲ免スルコトヲ得

第三十七條 假ニ監視ヲ免セラレタル者住居ヲ轉移スル時ハ第二十七條第三及ヒ第二十九條ノ例ニ從フ可シ

第三章 假出獄及ヒ特別監視

第三十八條 假出獄ヲ許ス可キ者アル時ハ獄司ヨリ其犯人ノ行狀及ヒ刑名入獄ノ年月ヲ記載シ

假ニ出獄ヲ許シテ内務司法兩卿ニ上申シテ許可ヲ受ク可シ

第三十九條 假出獄ヲ許シタル時ハ獄司ヨリ其證票ヲ犯人ニ下付ス可シ

第四十條 假出獄證票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 本人ノ屬籍氏名年齢住所姓名及ヒ處刑ノ年月日

二 殘期何年何月何日假出獄ヲ許ス事

三 假出獄中ハ特別監視ニ付ス可キ事

四 假出獄中更ニ重輕罪ヲ犯シタル時ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ヲ刑期ニ算入セザル事

第四十一條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者假出獄中自ラ財産ヲ治メ若シハ職業ヲ營マントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

第四十二條 假出獄ヲ許ス可キ者ハ濠ニ其住所ヲ定メシメ出獄ノ日獄司ヨリ其證票ノ謄本ヲ添ヘ犯人ヲ其住居ノ地ニ警察所ニ護送シ特別監視ヲ執行セシム可シ

第四十三條 特別監視ニ付スル者ハ第二十三條第二十四條第二十五條第二十六條第二十九條第三十一條ノ例ヲ適用ス

第四十四條 特別監視ニ付ラレタル者ハ其期限間左ノ條件ヲ遵守ス可シ

一 每週間一度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ



但疾病又ハ已ムトテ得サル事故アリテ警察所ニ到ルヲ能ハサル時ハ其事由ニ届出ツ可シ  
二酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルヲ許サス  
三事故アリテ往居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ケ可シ但他ノ府縣ニ轉移ス  
ルヲ許サス

四往復一日程ヲ過クル地ニ旅行スルヲ許サス  
第四十五條 特別監視ノ期間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルヲアル可シ  
第四十六條 假出獄ヲ許サレタル者刑期滿限ノ日ニ至レハ假出獄證票ヲ警察所ニ還納シ警察所  
ヨリ證票ヲ出シタル獄司ニ遞送ス可シ  
主刑滿限ノ後監視ヲ付ス可キ犯人ナル時ハ警察所ニ於テ第二章ノ例ニ從テ處分ヲ可シ  
第四十七條 假出獄ヲ許ス可キ者住所ナク及ヒ引取人ナキ時ハ第三十二條ノ例ニ從ヒ懲治場ニ  
留置ス可シ

第四章 刑事裁判費用

第四十八條 豫審公判ニ付キ呼出シタル證人醫師鑑定人通辨人翻譯人ニ給與ス可キ日當旅費止  
宿料及ヒ第五十一條第五十二條ニ記載シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス  
第四十九條 日當旅費及ヒ止宿料ノ金額左ノ如シ

日當五拾錢  
旅費一里拾錢

止宿料一宿貳拾五錢  
住居三里以外ノ地ニ在ル者ハ往復旅費ヲ給シ及ヒ呼出ノ地ニ滯在中ハ日當並ニ止宿料ヲ給ス  
其三里未滿ノ地ニ在ル者ハ旅費止宿料ヲ給セス

第五十條 證人ノ日當旅費及ヒ止宿料ハ本人ノ請求アルニ非サレハ之ヲ給與セス  
第五十一條 證人日當ヲ以テ生業トスル者治罪法第九十條ニ從ヒ償金ヲ要求スル時ハ旅費日  
當ノ外若干ノ償金ヲ給スルヲアル可シ

第五十二條 解剖舍密等ノ費用及ヒ數多ノ時間ヲ要スル翻譯料ノ類ハ日當ノ外別ニ之ヲ給與ス  
可シ  
第五十三條 裁判費用ノ宣告ヲ受ケ未タ之ヲ納メサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ其相續人ヨリ  
之ヲ徵收ス

第五章 賠償處分

第五十四條 贓物犯人ノ手ニ在ル時ハ直チニ被害者ニ還付スト雖モ若シ轉轉シテ他人ノ手ニ在  
ル時ハ被害者ノ請求ニ因リ還給セシムル者トス

第五十五條 贓物轉轉シテ他人ノ手ニ在ル時公商ニ由リ買取シタル物品ハ其公商若シハ被害者  
ヨリ買取者ニ原價ヲ償ハサレハ直チニ還給セシムルヲ得ス  
若シ公商ニ由ラヌシテ買取シタル物品ハ其還給ヲ拒ムトテ得ス但其買取者ハ賣者ニ對シ轉價  
ヲ求ムルヲ得

第五十六條 贓物ヲ受ケ又ハ典物トシテ受取タル者其贓物現在スル時ハ還給ヲ拒ムトテ得ス但  
典物トシテ受取タル者ハ典主ニ對シ轉價ヲ求ムルヲ得

第五十七條 贓物交換シテ現在スル時ハ公商ニ由ルト否トヲ區別シ第五十五條ノ例ニ從テ處分  
ス可シ  
第五十八條 贓物已ニ費用シタル時又ハ識別ス可カラサル時又ハ所在ノ知レサル時ハ損害ノ賠  
償ヲ請求スルヲ得

第五十九條 人ノ名譽若シハ殺傷ニ關シタル損害其他犯罪ノ爲メ現ニ生シタル損害ハ其賠償ヲ  
請求スルヲ得但失火ハ此限ニ在ラス  
第六十條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ其犯罪ヲ審判スル刑事裁判所ニ請求スルヲ得若シ其審判  
已ニ終リタル後ハ民事裁判所ニ非サレハ之ヲ請求スルヲ得ス

第六十一條 刑事裁判所ニ於テ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ請求スル者ハ通常ノ文書又ハ言語ヲ以  
テ之ヲ爲スルヲ得其民事裁判所ニ請求スル者ハ民事訴訟ノ程式ニ從フ可シ

刑法附則



八  
第六十二條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ本犯死スル時ハ其相續人ニ對シ之ヲ要求スルコトヲ得  
第六十三條 贓物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ケタル者還給賠償セサル時ハ被害者ヨリ更ニ民  
事裁判所ニ身代限ノ處分ヲ請求スルコトヲ得

# 治罪法

治罪法參考諸布令

布告制定



治罪法目錄

第一編 總則

第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章 通則

第二章 違警罪裁判所

第三章 輕罪裁判所

第四章 控訴裁判所

第五章 重罪裁判所

第六章 大審院

第七章 高等法院

第三編 犯罪ノ搜查起訴及ヒ豫審

第一章 搜查

第一節 告訴及ヒ告發

第二節 現行犯罪

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第二節 民事原告人ノ起訴

第三章 豫審

第一節 令狀

第二節 密室監禁

第三節 證據

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第五節 檢證及ヒ物件差押

治罪法目錄



- 第六節 證人訊問
- 第七節 鑑定
- 第八節 現行犯ノ豫審
- 第九節 保釋
- 第十節 豫審終結
- 第四編 豫審上訴
- 第四編 公判
- 第一章 通則
- 第二章 違警罪公判
- 第三章 輕罪公判
- 第四章 重罪公判
- 第五編 大審院ノ職務
- 第一章 上告
- 第二章 再審ノ訴
- 第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴
- 第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴
- 第六編 裁判執行復權及ヒ特赦
- 第一章 裁判執行
- 第二章 復權
- 第三章 特赦

治罪法

第一編 總則

- 第一條 公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢察官之ヲ行フ
- 第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贖物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス
- 第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス又告訴私訴ノ權利ニ因テ消滅スル者ニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス
- 第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スヲ許サレバ場合ハ此限ニ在ラス
- 又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得
- 第五條 公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲ス可シ
- 第六條 刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲ス可カラス若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ共ニ其效ナカル可シ
- 第七條 民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サレバ願下ヲ爲シ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スヲ得
- 刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ願下ヲ爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲スヲ得
- 第八條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要スルノ妨礙ト爲ルコトナカル可シ
- 第九條 公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

治罪法



一 被告人ノ死去  
二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和

三 確定裁判

四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

五六赦

六 期滿免除

第十條 私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被害者ノ棄權又ハ私和

二 確定裁判

三 期滿免除

第十一條 公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

一 遼寧罪ハ六月

二 輕罪ハ三年

三 重罪ハ十年

第十二條 私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖

モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス

公訴ニ付テ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ例ニ從テ

第十三條 公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ

起算ス

第十四條 期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ爲シ又豫審

若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期限ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セザル正犯從犯及ヒ民事

擔保人ニ付テモ亦同シ

期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期

限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラズ

第十五條 起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無效ニ屬スル時ハ期滿免除ノ期限

ノ經過ヲ中斷スルノ效ナカル可シ但裁判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スル時ハ此

限ニ在ラズ

第十六條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民

事原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過失ニ因

リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル時亦同シ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シト訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告人其上訴ニ因リ生シタ

ル損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第十七條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ要償ノ

訴ヲ爲スコトヲ得但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ

犯シタル場合ハ此限ニ在ラズ

第十八條 此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスル者ハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスル者ハ

初日ヲ算入セズ若シ最終ノ日休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ス可カラズ但期滿免除ノ期限ハ此限

ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從テ

第十九條 此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サル者ト雖モ三

里以上ナリ時亦同シ

島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタル時ハ特別ノ場合ヲ除クノ

外其權ヲ失フヘシ

治罪法



四

第二十一條 訴訟關係人ハ裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其地ニ假住所ヲ定メ書記局ニ届置シ

可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルコト得ス

第二十二條 此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ規則アラサル時ハ書記其送達書ヲ作り書記局所屬ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシム

▲參看使丁規則、明治十四年司法省丁第廿六號達ニ就テ見ル可シ

若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第二十三條 送達書ハ二通ヲ作り其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スコトヲ得サル時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ

送達人ハ之ヲ受取リタル者ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スコトヲ得ス若クハ是等ノ者之ヲ受取ルコトヲ得サル時ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ

送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載ス可シ本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ效ナカル可シ

送達人ハ其二通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ證トシテ之ヲ保存ス可シ

第二十四條 休暇ノ日及ヒ日出前日没後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラズ此規則ニ背キタル時ハ其送達ノ效ナカル可シ但本人承諾シテ其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス

第二十五條 官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ毎葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ效ナカル可シ

官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十六條 官吏其他何人ニ限ラズ訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ原本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラズ若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更増減ノ效ナカル可シ

第二十七條 此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則 頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサルハ其效アリトス

第二十八條 此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但此法律ニ抵觸スル規則ハ此限ニ在ラス

從前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラス

第二十九條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分スヘキ者ニ適用スルコトヲ得ス

第三十條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ從フ

第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章 通則

第三十一條 通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬ス

第三十二條 裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條 裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク

第三十四條 刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

一 犯罪ヲ捜査ス

二 犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス

三 裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス

五

第三十五條 檢察官一名ハ公廷ニ立會フ可シ

治罪法



第三十六條 裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク  
第三十七條 書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ

又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ

第三十八條 犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルノ左ノ如シ  
一 違警罪ハ違警罪裁判所  
二 輕罪ハ輕罪裁判所  
三 重罪ハ重罪裁判所

重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シテ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第三十九條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス  
一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時  
二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時  
三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カル、爲メ他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス  
犯罪ノ地分明ナラザル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十一條 數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一箇ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス  
數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條 犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ  
令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ

第四十三條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルノ能ハス若クハ法律上逮捕スルヲ許サ、ル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十四條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス  
數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スレ正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ本條ノ例ニ依ラズ  
第四十五條 外國ニ在テ犯シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ハシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

關係裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラザル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第四十六條 商船内ノ犯罪ニ付テハ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム  
第四十七條 豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラズ前ニ豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ハ哀訴及ヒ關係裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラズ此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

第四十八條 裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナリヤ否ヲ判決スルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルヲ得

第二章 違警罪裁判所  
第四十九條 治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

▲參看 明治十四年九月二十日第四十八號布告  
刑法治罪法中違警罪裁判ノ儀ハ當分三府五港ノ市區ヲ除クノ外府縣警察署又ハ警察分署ニテ裁判可致候條此旨布告候事

同年十月六日第五十四號布告  
治罪法



刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ管分ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要ヒスト見込ムモ  
ノニ限リ始審裁判所所在ノ地ヲ除ク、外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スコトヲ  
得可シ此旨布告候事但シ木文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ  
上訴ヲ許サス

第五十條 違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ

判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條 違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所在ノ地ノ警部之ヲ行フ  
▲參看 明治十四年十月十日司法省甲第五號布達

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ巡查ヲシテ警部ノ代理ヲ爲シシムル儀モ可有之候條  
此旨布達候事

同年十月司法省丙第十三號達略ス

第五十二條 違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作り輕罪裁判所檢事ニ差出ス可シ  
事件表ハ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第五十三條 違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ

第三章 輕罪裁判所

第五十四條 始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判ス

又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ

又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス  
第五十五條 輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ順次滿一年  
間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續シシムルヲ得

第五十六條 豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ命ス  
又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キヲ命スルヲ得

第五十七條 判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ

判事補ハ豫審父ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルトヲ得

第五十八條 輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審裁判所檢事又ハ其指名シタル檢事補之ヲ行フ

第五十九條 輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ

第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス

ルニ付テ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス  
左ニ記載シタル官更ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第三編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法警察  
官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

一 警視警部

二 區長警長

三 治安判事

四 警部ノ在ラサル地ノ戶長

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪取調ノ  
爲メ其管轄地内ニ於テ證憑其他事實參考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ受ケルコトアル  
可シ

第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り控訴裁判所檢事長ニ差出  
ス可シ

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附  
記ス可シ

事件表ハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第四章 控訴裁判所

第六十三條 控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス但其裁  
判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

治罪法



第六十四條 刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得

第六十五條 刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム

裁判所長ハ何時ニテモ裁判所長ト爲ルヲ得

第六十六條 刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢察長又ハ其指名シタル檢察官之ヲ行フ

第六十七條 檢察長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ輕罪裁判所檢察官ニ屬スル司法警察及ヒ起訴ノ

職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢察官ヲシテ之ヲ行ハシムルヲ得

又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ檢察官ニ傳達スルヲ得

檢察長ハ其管轄地内ノ檢察官及ヒ司法警察官ヲ監督ス

第六十八條 檢察長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

又輕罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス

可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六十九條 刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

第五章 重罪裁判所

第七十條 重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス

第七十一條 重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク

若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ檢察長ヨリ司法卿ニ具申シ其許可ヲ得テ臨時開應ス

ルヲ得

第七十二條 重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第七十三條 重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判所長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命ス

二 倍席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命シ始審

裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ

▲參看 明治十四年九月廿日第四十六號布告

治罪法第七十三條第二項之倍席判事四名下有之候ヘトモ當分ノ内二名ト相ヒ定メ候事

明治十四年十月六日第五十五號布告(全文ハ第七十九條ニ掲ケルヲ以テ參看セシム)

第七十四條 重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢察長又ハ其指名シタル檢察官之ヲ行フ

始審裁判所ニ於テ開ク時ハ檢察長ヨリ始審裁判所檢察官ヲシテ其職務ヲ行ハシムルヲ得

第七十五條 重罪裁判所書記ノ職務ハ開應ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

第七十六條 控訴裁判所檢察長ハ開應ノ後既決事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六章 大審院

第七十七條 大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

一 上告

二 再審ノ訴

三 裁判管轄ノ定ムルノ訴

四 公使又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條 刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可カラズ

第七十九條 刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之ヲ命ス判事差支アル時ハ民

事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ

▲參看 明治十四年十月六日第五十五號布告

治罪法第七十六條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ備當分其裁判所長又ハ院長ノ臨時

指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

第八十條 刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢察長又ハ其指名シタル檢察官之ヲ行フ

治罪法



第八十一條 刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ  
第八十二條 檢察長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ  
事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ  
第七章 高等法院

第八十三條 高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス  
又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該シ可キ輕罪ヲ裁判ス  
又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

前二項ニ記載シタル者正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其院ニ於テ之ヲ裁判ス  
第八十四條 高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其裁判ス可キ事件及ヒ開院ス  
可キ場所亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第八十五條 高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ  
一 裁判長一名陪席裁判官六名但元老院議員大審院判事中心ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ス  
二 豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條 豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名ニ之ヲ命ス  
第八十七條 高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢察長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行フ  
第八十八條 高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

第八十九條 高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スルヲ得  
一 關席裁判アリタル場合ニ於テ故障  
二 第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴  
三 第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ヲ訴

第九十條 被告事件夥多ナル時又ハ再審ヲ訴テ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スルヲアル可シ  
第九十一條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審  
第一章 捜査

第九十二條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴發見行犯其他ノ理由ニ因リ犯罪アルヲ認知シ又  
ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其證據及ヒ犯人ヲ捜査シ第百七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手續  
ヲ爲スヘシ

第一節 哀訴告發

第九十三條 何人ニ限ラズ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地  
ノ豫審判事檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルヲ得

豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ  
檢事告訴ヲ受ケタル時ハ第百七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致ス可シ  
違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルヲ得其告訴ヲ受  
ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移スヘシ

第九十四條 告訴人ハ成ルヘク其證據及ヒ事實悉考ト爲ル可キヲ申立ツ可シ  
又告訴人ハ第百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルヲ得

第九十五條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ  
又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲ス可シ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ圖書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カ  
シ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記スヘシ

告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ

第九十六條 官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルトヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル  
時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事實悉考ト爲ル可キ事物

治罪法



ヲ添可シ

違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

第九十七條 何人ニ限ラズ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢察事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得

告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第九十八條 告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但第九十六條ノ場合ハ此限ニ在ラス

無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人ニ爲スモ其効アリトス

第九十九條 告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其中立ヲ變更スルコトヲ得此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ニ對シテ要償ノ訴ヲ受クルコトアル可シ

第二節 現行犯罪

第一百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第一百一條 重罪輕罪ニ付テ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

▲參看 明治十四年九月二十日第四十六號布告

治罪法第一百條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト思料ス可キ者アルルハ當分ノ内現行犯ニ准シ處分メルコトヲ得

一犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、時

二兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帶シタル時

三家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢査スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第一百二條 司法警察官及ヒ巡查其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告

發ス可シ其氏名住所不明ナラヌ又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルコトヲ得

第一百三條 巡查被告人ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ又ハ其職務ニ當リ

其被告人ヲ送附シテ司法警察官ニ送附スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ又ハ其職務ニ當リ

第一百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢査處分

ヲ爲ス可シ又ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ又ハ其職務ニ當リ

第一百五條 何人ニ限ラズ重罪輕罪ノ現行犯者其場合ニ當リ之ニ對シテ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致ス

ルコトヲ得ば其職務ニ當リ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查ニ引渡スコトヲ

得ルコトヲ得

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

被告入又ハ巡查ノ對シテ又ハ其職務ニ當リ之ヲ逮捕スル時ハ其職務ニ當リ司法警察官ニ引致ス可シ

治罪法



第百八條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可ク  
第百九條 檢事豫審ヲ求ムル時ハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且隨檢ス可キ場所  
逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ被告人トナル可キ者ヲ指示ス可ク

第二節 民事原告人ノ起訴

第百十條 重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又  
ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可ク  
豫審判事直ニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キヲ申立テ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト  
雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者ナシ  
豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直ニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立テ受ケタル時  
ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可ク

第百十一條 被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若  
クハ其要ムル所ヲ變更スルヲ得

又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヲ得

第百十二條 被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スヲ得

被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人ノ之ヲ爲ス可ク

第三章 豫審

第百十三條 現行ノ重罪輕罪ノ除クテ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原  
告人ノ請求アルニ非サレバ豫審ニ取掛ルヲ得ズ此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係  
ル手續ノ効ナシトス

第百十四條 豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直ニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告  
人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事  
ニ送致ス可ク

第百十五條 豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直ニ被告ノ對シテ勾引狀ヲ發シ又  
ハ訊問シタル後勾引狀ヲ發スルヲ得此場合ニ於テハ連ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證據及ヒ事  
實參考トナル可キ事物ヲ送致ス可ク

若シ其通知ヲ爲シタル日ヨリ一日内ニ檢事起訴ヲ爲サレバ連ニ被告人ヲ放免ス可ク但後日  
起訴ヲ爲スノ妨礙ト爲ルヲ得

第百十六條 被告人所在ノ地ノ豫審判事直ニ告訴告發ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告  
事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル後證據及ヒ事  
實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス

若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルヲ得

第百十七條 檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閱スルヲ得但二十四  
時内ニ之ヲ還付ス

又必要ナルトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スヲ得

第一節 合狀

第百十八條 豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニヨリ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被  
告人ニ對シテ先ツ召喚狀ヲ發ス可ク但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶  
豫アル可ク

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可ク又遅クトモ出廷ノ白ヲ過クルヲ得

第百十九條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ  
明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルヲ得

第百二十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルヲ得

第百二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直ニ勾引狀ヲ發スルヲ得

治罪法







ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅館屋賃座敷ハ日出前日没後ニ拘ハラス搜索致  
シ書シカラス

第三百二十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潜匿シタルコトヲ知リ又ハ潜匿シタルト思料シ  
ル場合ニ於テ被告事件急遽ヲ要スル時ハ巡査ニ令狀ヲ發行セシタルコトヲ得

第三百二十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被  
告人ノ人相書ヲ送致シ捜査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キコトヲ請求スルヲ得

第三百二十六條 陸海軍在營ノ軍人軍属ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長  
官ハ已ムコトヲ得サルニ非ザレハ本人ヲ速ニ令狀ニ應ヒシム可シ其行軍ノ際亦同

第三百二十七條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致スル  
コトヲ其監倉ニ引致スルコト能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルコトヲ得

第三百二十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ之ヲ執行シタルコト又執行スルコト能ハサル時ハ其  
事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

第三百二十九條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人既ニ監倉若クハ獄舎ニ在ル時ハ書記ヨリ之  
ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ記載ス可シ

第三百四十條 密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又  
ハ代理人ニ接見スルコトヲ得

第三百四十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ルニキ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中  
何時コトモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消スベシ但收監狀ヲ取消スル時ハ豫ノ檢察官ノ意見ヲ聽ク

第三百四十二條 監倉ニハ刑法治罪法ニ備置ル被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第三百四十三條 密室監禁 密室ニハ其刑ニ該ル被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第三百四十四條 豫審判事ハ豫審中事實發見ヲ爲ス必要ナリト思料シタルハ檢事ノ請求ニ因  
リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲ナスコ  
トヲ得

第三百四十五條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ  
得ルニ非ザレハ他人ト接見シ又ハ書籍貨幣其他ノ物品ヲ授受スルハ禁ジラル

第三百四十六條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ其言渡ヲ受ケタル時ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セ  
ルモノハ其言渡ノ範圍ニ於テ之ヲ給與ス可シ

第三百四十七條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ其言渡ヲ受ケタル時ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セ  
ルモノハ其言渡ノ範圍ニ於テ之ヲ給與ス可シ

第三百四十八條 豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲  
メ必要ナリトスル證據徴憑ヲ集取スベシ

第三百四十九條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人証人ヲ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ  
必要トス書記ハ調書ヲ作リ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

第三百五十條 豫審判事ハ其言渡ヲ受ケタル時ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與ス可シ

第三百五十一條 豫審判事ハ其言渡ヲ受ケタル時ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與ス可シ

第三百五十二條 豫審判事ハ其言渡ヲ受ケタル時ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與ス可シ

第三百五十三條 豫審判事ハ其言渡ヲ受ケタル時ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與ス可シ

第三百五十四條 豫審判事ハ其言渡ヲ受ケタル時ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與ス可シ

第三百五十五條 豫審判事ハ其言渡ヲ受ケタル時ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與ス可シ

第三百五十六條 豫審判事ハ其言渡ヲ受ケタル時ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與ス可シ

第三百五十七條 豫審判事ハ其言渡ヲ受ケタル時ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與ス可シ

第三百五十八條 豫審判事ハ其言渡ヲ受ケタル時ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與ス可シ

第三百五十九條 豫審判事ハ其言渡ヲ受ケタル時ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與ス可シ

第三百六十條 豫審判事ハ其言渡ヲ受ケタル時ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與ス可シ







被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親族若シ其在ラサル時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

第三百三十三條 第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ヲ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ逕延スヘカラス

第三百六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フヘシ物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ原本ヲ立會人ニ渡スヘシ

第三百六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシムヘシ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ  
第三百六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ証人ノ陳述ヲ聽クヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ノ之ヲ訊問スヘシ

第三百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス  
第三百六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何時ニ限ラス允許ヲ得シテ其場所ニ出入ルルヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯スアル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヲ得  
第三百六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ得

▲參看 明治十四年九月廿日第四十六號布告  
治罪法第六十八條第七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヲ許シタル處分ハ管分ノ内其地

ノ司法檢察官ニモ囑託スルヲ得

第三百六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開拔スルヲ得但受取證書ヲ渡スヘシ

前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ  
第六節 證人訊問

第三百七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ証人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出スヘシ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル事ハ此限ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ証人トシテ之ヲ呼出スヲ得  
▲參看 明治十四年九月廿日第四十五號布告

豫審又ハ公判ニ付証人ヲ呼出サント請フ者アルルハ裁判所ニ於テ其旅費日常等ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシムヘシ

モレ被告人旅費日常ヲ豫納スルノ資力ナキトキハ治罪法第七十條ノ制限ニ從ヒ裁判所ニ於テ其費用ヲ立替置クヘシ

第三百七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出スヘシ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達スヘシ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ  
第三百七十二條 豫審判事ハ證人裁判所外ニ在ル地ニ住セサルルハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ルルハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

治罪法



本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス

▲參看 明治十四年九月廿日第四十六號布告  
治罪法第百六十八條第百七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルコトヲ許シタル處分シ當分ノ内其地

ノ司法警察官ニモ囑託スルコトヲ得  
第百七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スル事アル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ  
第百七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ証明シタル時ハ

豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ  
第百七十五條 證人ト爲ルヘキ者陸海軍在營ノ軍人事務ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀

ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシムヘキコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アル時ハ其

事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ  
第百七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メルテ差支ノ場合ヲ除クノ外證人呼出ニ應セサル時ハ檢

事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ビ控訴ヲ許

ス  
豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發ス

ル事ヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム  
若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルコトアル可シ

第百七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルコト其呼出狀第百七十三條ノ規

則ニ背キタルコト又ハ豫知ノ難キ正當ノ事故ヲ以テ出廷スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ檢

事ノ意見ヲ聽キ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第百七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出スヘシ若シ之ヲ遺失シ

タルハ其人違フコトヲ證明スヘシ

第百七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ビ第百八十一

條ニ記載シタル者ナリヤ否ヤヲ問フヘシ

第百八十條 豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎具懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲナスヘキコトヲ宣誓セシム

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聽カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルハ其

旨ヲ附記スヘシ  
宣誓書ハ訴訟書類ニ添附クヘシ

第百八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クコト

得  
一 民事原告人  
二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者  
四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第百八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ  
一 十六歳未満ノ幼者  
二 知覺精神ノ不充分ナル者  
三 瘡癩者

四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者  
五 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ  
六 現ニ陳述ヲ爲スヘキ事件ニ付キ會テ訴ヲ受ケ其證據充分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケ



ル者

第百八十三條 證人宣誓ヲ肯セヌ又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢察ノ意見ヲ聽キ  
刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡スヘシ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サズ  
醫師藥商繙譯又ハ代書人辯護人代官人公證人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件  
ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

第百八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリ  
トスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得

第百八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯  
所又ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

若シ證人同行スルコトヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ  
第百八十六條 第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百八十七條 皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ  
第百八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ

其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルコト又ハ爲ササルノ事由ヲ記載ス可シ  
第百八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀  
聞カセシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更増減シテ請求スルコトヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更増減ノ條件  
ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルコト能ハサル時  
ハ其旨ヲ附記スヘシ

第百九十條 證人ハ即時ニ出庭ニ付テハ旅費日當ヲ要ムルコトヲ得  
若シ日線ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日線高二等シキ賃金ヲ要ムルコトヲ得  
本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節 鑑定

第百九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリト  
スル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得ハキ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシムヘシ

第百九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出スヘシ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ  
鑑定ヲ命スルコト及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡スヘキコトヲ記載スヘシ

鑑定人呼出ニ應セザル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス  
第百九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從テ  
書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルコトヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ニ添置ク可シ

第百九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セヌ又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セザル時ハ豫審判事檢察ノ意見ヲ聽  
キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サズ

第百九十五條 第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルコトヲ得ス但急遽ノ  
際正當ノ鑑定ハト爲ル可キ者ナキハ事實ヲ考メ爲メ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第百九十六條 豫審判事ハ成ル可シ鑑定ニ立會フヘシ

第百九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ  
鑑定セシムルコトヲ得

第百九十八條 鑑定ハ鑑定書ヲ作リテ手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ  
若シ 果ヲ得サルハ 鑑定書ニ 載ス可シ

鑑定ハ意見ヲ異ニスルハ各自鑑定書ヲ作リテ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載スヘシ  
第百九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印スヘシ

又鑑定書ニハ豫審判事ニ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ捺印スヘシ

鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作リタル譯本ヲ添置クヘシ

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與スヘシ



第八節 現行犯ノ豫審

第二百一十一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第二百一十二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナル事ヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ類ノ事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒテ終結ス可シ

第二百一十三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リタルハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スコトヲ得

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ニ宣誓ヲ用フルコトヲ得

第二百一十四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百一十五條 第二百一十三條ニ於テ檢事ハ職務ハ司法警察官モ亦假シ之ヲ行フコトヲ得但令狀ヲ發スルコトヲ得

▲參看 明治十四年九月廿日第四十六號布告

治罪法第二百一十五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルコトヲ得ヤル旨記載有之候得共當分ノ内現行犯ノ場合ニ限り令狀ヲ發シテシカラス

司法警察官ハ証憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ決ニ之ヲ檢事ニ送致可シ

第二百一十六條 檢事被告人ヲ受取タル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致スヘシ

若シ起訴ヲ爲メスカラザル者ト認メタルハ直チニ被告人ヲ放免スヘシ

第二百一十七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問スヘシ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルコトヲ得

第二百一十八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付テ更ニ其取調ヲ爲スコトヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置シ得

第二百一十九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トヲ拘ヲス被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スコトヲ得

第九節 保釋

第二百二十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聞キ何時ニテモ呼出ニ應ジ出廷ヲ可キコト證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スコトヲ得

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第二百二十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出スコトヲ得

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲スコトヲ得

第二百二十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證ヒシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スリ言渡書ニ記載ス可シ

第二百二十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若シハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出スコトヲ得

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル實力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

第二百二十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケテ正當ノ事由ナリシラ出廷セザル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ沒入ス可シ

第二百二十五條 保證金ヲ沒入スルコトハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其旨渡ヲ爲スコトヲ得

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ

第二百二十六條 豫審判事保證金ヲ沒入シタル時ハ保釋ノ旨渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ旨渡ヲ取消スルコト必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其旨渡ヲ取消ス可シ

治罪法

第二百二十七條 豫審判事保證金ヲ沒入シタル後免訴ノ旨渡違警罪裁判所ニ移スノ旨渡又ハ罰金



ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ旨渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還付ス可シ  
第二百十八條 豫審判事免訴ノ旨渡違警罪裁判所ニ移スノ旨渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ旨渡ヲ爲シタル時ハ保釋ノ旨渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ  
第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハヌ檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

▲參照 明治十四年九月廿日第四十七號布告  
第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應ジ出廷セシム可キノ證書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷セシム二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ  
第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナシシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消ス

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ  
檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラヌト思料シタルハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサルハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハヌ後ニ記載シタル旨渡ヲ以テ豫審ヲ終結スヘシ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サル事ヲ認メタル時ハ其旨ヲ旨渡ス可シ若シ勾留ノ要スル者ト認ムル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ旨渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受タル時ハ放免ノ旨渡ヲ爲ス可シ  
一 犯罪ノ証憑充分ナラザル時  
二 被告事件罪ト爲ラザル時  
三 公訴ノ期間免除ト爲リタル時  
四 確定裁判ヲ經ル時  
五 大赦アリタル時

六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時  
本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サルニ要償ノ訴ヲ爲ス事ヲ得ス  
第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ旨渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ旨渡ヲ爲ス可シ  
第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ旨渡ヲ爲ス可シ  
被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金又ハ刑ニ該ル可キ者ト思料シタルハ釋放ノ旨渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スコトヲ得  
若シ被告人未ダ勾留ヲ受ケタル時ハ令狀ヲ發スルコトヲ得  
第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ旨渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其旨渡ヲ取消ス可シ  
重罪裁判所ニ移スノ旨渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監督ニ被告人ヲ附置ス可キコトヲ記載ス可シ

第二百二十八條 豫審終結ノ旨渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ  
管轄ニ非サル旨渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キハ其理由ヲ明示ス



免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト公訴受理ス可カラサルコト及ヒ其理由又犯罪ノ  
 證據充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示スヘシ  
 違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質證據證據ノ充分  
 ナルコト及ヒ其罪ヲ罰スヘキ法律ノ正條ヲ明示スヘシ  
 第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示スヘシ  
 第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ原本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達スヘシ  
 但是等ノ者ハ第三百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得  
 第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルコト能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ルヘキ  
 輕罪ニ付テ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載スヘシ但被告人ハ現  
 在ニ拘留ヲ受ケルニ非サルハ其旨渡ニ對シ上訴ヲ爲ス事ヲ得ス  
 第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フヘキ事ヲ  
 民事裁判所ニ請求スルコトヲ得  
 第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告スヘ  
 シ  
 又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付テ簡略ナル報告書ヲ差出スヘシ  
 第四章 豫審上訴  
 第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ  
 爲ス得ルコトヲ得  
 一 管轄違ハ申立テ棄却シタル時  
 二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時  
 三 法律ニ背キ關係釋責付ヲ爲シ又或之ヲ爲サズ時  
 四 越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付テ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スコトヲ得ス  
 第二百三十五條 故障ヲ爲シタル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出スヘシ  
 故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ原本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出ス  
 コトヲ得  
 故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付テハ檢事ヨリ故障アリタル  
 時ハ其執行ヲ停止ス  
 第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辯書其他訴訟書類  
 及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ  
 會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲ス  
 コトヲ得  
 第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判  
 事ヲ忌避スルコトヲ得  
 一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時  
 二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ト後見人ナル時  
 三 豫審判事又ハ其配偶者ト民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ト親屬ト非ス雖モ  
 豫審判事收受シ若シ豫審判事ト豫審判事ト豫審判事ト豫審判事ト豫審判事ト豫審判事ト豫審判事ト  
 第二百三十八條 忌避ノ申立テ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立テ爲スニハ趣意書二通ヲ書記  
 局ニ差出スヘシ  
 書記局ニ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申立テヲ認  
 可シ又或棄却スルコトヲ得趣意書紙ノ尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ差置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ  
 第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立テ棄却シタル時ハ其申立テヨリ故障ヲ爲スコトヲ得  
 會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯明書ニ依リ判決ヲ爲スヘシ  
 第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立テ棄却シタル時又ハ其申立テ棄却シタルニ付テ故障アリタル  
 治罪法



時、雖も豫審ノ手續ヲ繼續スルニ但終結ノ旨渡ヲ爲スコトヲ得ヌ  
又急速ニ要セザル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルコトヲ得  
第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テハ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スコトヲ得  
但豫審終結ノ旨渡アリタル後ニ非サレバ之ヲ爲スコトヲ得ヌ  
第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル理由アリテ認メ又ハ回避ス可キ者  
ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ  
回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ  
第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認メタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲ  
シテ豫審ヲ爲サシムルニ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判  
事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スコトヲ得  
第二百四十四條 書記自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立之ヲ忌避スルコ  
トヲ得  
第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得ヌ若シ自ラ回避ス可  
キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ルコトヲ得  
檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可  
ク得

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ旨渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得  
民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アリニ因リ豫審終結ノ旨渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得  
被告人ハ重罪裁判所ニ移メテ旨渡ニ對シ故障ヲ爲ス事ヲ得輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移  
メテ旨渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違越權ニ非サレハ  
故障ヲ爲ス事ヲ得ヌ  
第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但旨渡書ヲ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス  
第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局差出スヘシ書記ハ  
速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ  
故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出スヘシ  
書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得  
第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ニ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スコ  
トヲ得  
附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達スヘシ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ  
差出スコトヲ得

第二百五十條 豫審終結ノ旨渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止  
ス但被告人ハ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スル旨渡ハ其執行ヲ停止セズ  
第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辯書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ  
第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ  
豫審判事ノ旨渡ヲ認メタル時ハ其旨ヲ旨渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ  
付テ更ニ旨渡ヲ爲ス可シ  
又被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スル旨渡ヲ爲スコトヲ得  
第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示  
スル所ノ條件ニ付テ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ  
第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ訴訟受理ス可カラザルコトヲ覆見シ  
タル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ旨渡ヲ取消スコトヲ得  
第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケザル者アルト附帶ノ犯罪ニ付キ  
豫審ヲ受ケザル者アルコトヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ  
豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出ス可シ  
檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ  
會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

治罪法



第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其旨渡書ヲ原本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達スル

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ旨渡書ニ對シ上告ヲ爲スルヲ得

第二百五十八條 被告人ニ送達シ可キ旨渡書ニハ其旨渡書ニ對シ上訴スルヲ得

第二百五十九條 第三百一十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ旨渡書確定シタル時ハ檢事其旨渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ總ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ旨渡書受ケ其旨渡書確定シタル時ハ罪名ヲ變更アルモ同一ノ事件ニ付テ更ニ訴ヲ受クルコトヲ可シ但新ナル證據アル時ハ此限ヲ在ラス

新ナル證據アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決スル

第四編 公判

第一章 通則

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付スル

第二百六十三條 重罪輕罪違背罪ノ訊問辯論及ヒ裁判旨渡ハ之ヲ公行ス否ヲ裁スル時ハ其旨渡ノ效ヲ有スル

第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルコトヲ得其裁判旨渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許スル

第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スルテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルコトヲ得

第二百六十六條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フルコトヲ得

第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧嘩ヲ爲シ辯論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ拘留スルコトヲ得

第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルコト能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス

第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ旨渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アルニ非サレハ關席裁判ヲ爲ス可カラズ

豫審終結ノ旨渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スル事能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサルハ關席裁判ヲ爲スヘキノ告知書ヲ親屬若クハ戶長ニ

治罪法

豫審終結ノ旨渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スル事能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサルハ關席裁判ヲ爲スヘキノ告知書ヲ親屬若クハ戶長ニ



送達スヘシ

第二百七十條 關席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フル事ヲ許サス但其親屬故舊ハ被告人ノ  
出廷スル事能ハサルノ事由ヲ證明スル事ヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルコトヲ得  
第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ  
從ヒ對審裁判ヲ爲スヘシ

第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲スヘシ  
稱讚誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルコトヲ得

第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハタス裁判長  
ノ命令ニ因リ之ヲ取押ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡  
ヲ爲スヘシ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ルヘシ  
第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ  
付キ始審ノ裁判ヲ爲スヘシ

輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ  
第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ  
作り裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ  
言渡ヲ爲スヘシ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲スヘカラス但辯論ニ因リ發  
見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スル事ヲ得  
第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何  
時ニテモ管轄違又ハ公訴受理スヘカラサルノ申立ヲ爲スコトヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲナス事ヲ得  
第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タヌ直チニ控  
訴又ハ上告ヲ爲ス事ヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判  
所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スコトヲ得  
豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタ  
ル時亦同シ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得  
忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百三十八條ヨリ第二百四十五  
條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛  
ルヘシ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ  
變災危難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ  
第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏  
ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルコトヲ得

是等ノ書類ハ原被告人ノ陳述ト同一ノ効ヲ有ス  
第二百八十五條 調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出  
シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書就  
明ノ爲メ之ヲ呼出スコトヲ得  
第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

治罪法

治罪法

治罪法

治罪法

治罪法

治罪法

治罪法

治罪法

治罪法

治罪法

治罪法

治罪法



豫審ニ於テ録取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サ、ル時證人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヲ得

第二百八十七條 第七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條 證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラズ又陳述前辯論ニ立會フ可カラズ

第二百八十九條 證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條 證人數名アル時ハ氏名自録ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヲ得

第二百九十一條 證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヲ得

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條 證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キヲ言渡ラ爲スヘシ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ録取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付テ裁判ノ延期ヲ言渡スヲ得

第二百九十三條 證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其實渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サズ

一 違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人關席シタル時ハ呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラズ

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達スヘシ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヲ能ハサリシ正當ノ事由ヲ証明シタル時ハ裁判所ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其閉廳シタ裁判所ニ其中立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判延期スルノ言渡ヲ爲スヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サ、ル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條 證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡スヘシ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發スヘシ

第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ處分スヘシ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出スルハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條 被告人證者等又ハ國語ニ通セサル者ナルルハ第二百五十六條第二百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條 被告人數名アルルハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ

第三百條 事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得

證憑調得ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

治罪法



檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルコトヲ得ス  
檢察官其他訴訟關係人ハ迷ヒニ辯論ヲ爲スコトヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ  
發言セシム可シ

第三百一一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ  
第三百二條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽  
キ直キニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非  
レハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルコトヲ得  
又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルコトヲ得  
若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言  
渡ヲ待タズ直キニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證  
憑ヲ明示ス可シ  
免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其現由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證據ナキコトヲ明示ス可シ  
第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ  
私訴ニ付キ取調未タ充分ナラザル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲ス事ヲ得

第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分  
ヲ擔當ス可キノ言渡ヲナスヘシ  
免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ  
私訴裁判所費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ取訴セタル者之ヲ擔當ス可シ

第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請  
求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執  
行ヲ停止ス

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非サレハ上訴ヲ  
爲ス事ヲ得ス

第三百十一條 拘留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ  
監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ  
其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但變災厄難ヲ  
免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添へ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出  
ス事ヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局コトヲ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ  
否ヲ判決ス可シ  
上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常ノ規則  
ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ  
上訴ヲ受理ス可カラザル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サ  
シム可シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲スハ  
裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作リ書記ト共ニ署名捺印ス可シ  
裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可  
シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムルコトヲ得但上訴  
治罪法



ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ告知シ又關席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作リ左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

- 一 裁判ヲ公行シタルヲ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヲ及ヒ其事由
- 二 被告人ノ訊問及ヒ其陳述
- 三 證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ若シ宣誓ヲ爲サ、ル時ハ其事由
- 四 原被ノ證據物件
- 五 辯論中異議ノ申立アリタルヲ後日ヲ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルヲ是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決
- 六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタルヲ

第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辯論日ニ涉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヲ記載ス可シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印スヘシ裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閱シ若シ意見アリ、ル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條 裁判言渡及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニシテ送付ス

第二章 違警罪公判

第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

- 一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀
- 二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百二十二條 呼出狀ハ呼出ヲ受リ可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サ、ルキハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヲ得

第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急迫ヲ要スルハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲ス事ヲ得

第三百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタルハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽ク事ヲ得

第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ官吏ノ作リタル證書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ

檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル證書而テ差出ス可シ

第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證據ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察



官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルコトヲ得  
 若シ白狀ナキ時ハ原告ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出スヘシ  
 第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ  
 民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ  
 被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ  
 第三百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人事務擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事  
 原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ  
 民事原告人出廷セサル時亦同シ  
 第三百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住  
 所ニ之ヲ送達ス可シ  
 闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲサントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其申立書  
 書記局ニ差出ス可シ  
 第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可  
 キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルヲ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對  
 手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アルベシ  
 又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ  
 第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三十條マテ  
 ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ  
 其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲナスコトヲ得ス  
 第三百三十五條 犯罪ノ證憑充分ナラサルハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ  
 又第三百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲナス可シ  
 第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且證憑充分ナルハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲スベシ  
 第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢察  
 官ニ送致ス可シ但シ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルコトヲ得

第三百三十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルコ  
 トヲ得  
 ▲參看 明治十四年九月第四十五號布告  
 刑事裁判所ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ控訴又ハ上告ヲ爲ス者アル時ハ原裁判所ニ於テ其  
 訴訟費用ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシム可シ若シ豫納スルコト能ハサルハ控訴又ハ上告ヲ爲  
 スコト許サス

一 被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時  
 二 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テテ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超  
 過シタル時  
 三 檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサルハト雖モ管轄違越權濫律ノ錯誤又ハ  
 無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百三十九條 控訴ヲ爲シトスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出スヘシ  
 但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日内又闕席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人  
 又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

控訴ヲ爲スノ申立アリタルハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ  
 第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受リキ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送  
 致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナルハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差  
 出ス可シ

第三百四十一條 控訴ヲ受リ可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シ  
 ル後其裁判ニ附掛ル可シ  
 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

治罪法



證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可レ  
第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スコトヲ得但附  
帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルコトヲ得

第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲナスニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判スヘ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳述シタ  
證人ヲ呼出ス事ヲ得

第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ  
取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲スヘシ

被告人ノ控訴ヲ爲シタル限ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡ス事ヲ得ス  
私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ關席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス  
第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲ス  
事ヲ得

▲參看 明治十四年九月第四十四號布告

違警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ治罪法ニ從フヘシト雖トモ實際已ムヲ得サル場合ニ於テハ  
前分ノ内便宜取計ヒ其裁判言渡ニ付テハ上訴ヲ許サス  
同年九月第四十五號布告(全文ハ第三百二十八條ニ掲ケタルヲ以テ略ス)

第三章 輕罪公判  
第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス  
一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡  
第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ルヘキ時ハ代人ヲシテ出廷セシムル事ヲ得ヘキ旨ヲ呼  
出狀ニ記載スヘシ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルコトヲ得

第三百五十條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出スヘシ

第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ハタル後被  
告事件ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明ス可シ

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ  
被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシムヘシ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述スヘシ

民事原告人ハ要價ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲ス事ヲ得

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ關席裁判ヲ爲ス  
コトヲ得ヘキ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル限ハ關席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條 關席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ  
亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 關席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ  
期滿免除ニ至ルマテ放障ヲ爲スコトヲ得

一 被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二 裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三 被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタル事ヲ知リタルノ證アル時



第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヨリ知  
 リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲スコトヲ得  
 第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要爲リトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請  
 求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若シハ臨檢ヲ爲スコトヲ得但是等ノ  
 處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ  
 又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告  
 書ヲ差出サシムルコトヲ得  
 第三百五十八條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ  
 又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ  
 本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ  
 第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ  
 釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ  
 第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送  
 付スルノ言渡ヲ爲スヘシ但被告人勾留ヲ受ケサル時ハ勾引狀ヲ發ス可シ  
 訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致スヘシ  
 第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可  
 シ  
 會議局ニ於テハ第二百五十三條第百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ  
 送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ  
 第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證據ヲ發見スルコトヲ  
 シテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ  
 檢事ハ大審院ニ於テ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ  
 第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ

又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得  
 又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スコトヲ得  
 第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ  
 被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ  
 求ムルコトヲ得  
 第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁  
 判所ニ控訴スルコトヲ得  
 ▲明治十四年九月第四十五號布告(第三百二十八條參看)  
 一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタルハ但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ  
 其事件ヲ輕罪ナリトスル時  
 二 被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除ク外刑ノ言渡ヲ受ケタル時  
 三 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超  
 過シタル時  
 四 檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時  
 第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日内ニ之ヲ爲スコトヲ得  
 關席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ  
 爲スコトヲ得但第二百五十六條ノ場合ニ於テハ五日内ニ之ヲ爲ス可シ  
 第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢  
 察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移スヘシ  
 第三百六十八條 第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニ  
 亦之ヲ適用ス  
 第三百六十九條 輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件  
 ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ



爲可シ  
 第三百七十條 控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ  
 第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シテ上告ヲ爲スルヲ得  
 ▲明治十四年九月第四十五號布告(符三百三十八條參看)

第四章 重罪公判

第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス  
 一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スル言渡  
 二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スル言渡  
 第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スル言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ  
 一 控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事ハ公訴狀ヲ作ル可シ  
 二 始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作リ又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ判事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ  
 第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ  
 一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ根據  
 二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地  
 三 豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證憑  
 四 罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スル言渡ノ概略  
 第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スル言渡書ニ記載シタル事以外ノ事件又ハ被告人ノ記テ可カラズ  
 第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スル言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作リタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲スルヲ得  
 長ニ請求スルヲ得  
 裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得  
 第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日前ニ公訴狀ノ原本ヲ被告人ニ送達ス可シ  
 被告人數名アル時ハ各別ニ其原本ヲ送達ス可シ  
 第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ  
 若シ辯護人ヲ選任セサルハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任ス可シ  
 被告人及ヒ代官人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代官人一名ヲ以テ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヲ得  
 辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルヲ得ス  
 第三百七十九條 辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選スヘキ正當ノ事由ヲ申立タル時被告人ヨリ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ  
 第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作り辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタル後判裁ス可シ  
 辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ  
 第三百八十一條 辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカル可シ  
 第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲ス事ヲ得ス

治罪法

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲ス事ヲ得ス



第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スル事ヲ得又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スル事ヲ得  
辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判官言渡アルマテ被告人ト接見スルコトヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラズ

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目録ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ  
被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目録ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目録ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クコトヲ得ズ但對手人ヨリ異議ナキ事ヲ申立シタル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽ク事ヲ得

第三百八十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クとも二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開庭ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開庭スヘキ事ヲ陳述スヘシ但被告人ヲ呼出ス可カラズ

第三百八十七條 裁判長辯論二日以上ニ渉ルヘシト思料シタルハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所檢事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲ス事ヲ得

第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ルヘシ  
裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ  
若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツヘシ  
其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キコトヲ被告人ニ告知スヘシ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ  
被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セヌ又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辯明セシム可シ

第三百九十二條 被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サ、ル可カラズ

第三百九十三條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付辯解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可キ事ヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十四條 裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ  
第三百九十五條 證人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラズ

第三百九十六條 陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ證人ヲ訊問スルコト又證人ヲシテ他ノ證人ト對質セシムルコトヲ請求スルヲ得

第三百九十七條 裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第三百九十八條 裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スコトヲ得サル可シト思料シタルハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルコトヲ得

第三百九十九條 裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第四百條 裁判長ハ第三百九條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルコトヲ言渡ス可シ

第四百一條 檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムル事ヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタルハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ後審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第四百二條 第一項ノ規前ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第四百三條 治罪法



第三百九十八條 辯論終結ノ旨渡アリタルハ檢察官法律適用ノタメ其意見ヲ陳述ス可シ  
被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルコトヲ辯論スルヲ得  
第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述スヘシ  
被告人辯護人及ヒ民事辯護人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得  
檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百條 被告事件重罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ旨渡ヲ爲スコシ

第四百一節 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ無罪ノ旨渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百二條 辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ原告ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ旨渡ヲ爲スコシ

第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百四條 關席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀シ又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百五條 關席裁判ヲ爲スニハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條 關席裁判ニ係ル刑ノ旨渡ニ對シテハ檢察官ニ非カレハ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百七條 關席裁判ニ因リ刑ノ旨渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日内ニ故障ヲ爲スコシ

第四百八條 故障ノ申立ハ關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲スコシ

第四百九條 重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヨ判決ス可シ

其故障ヲ受理スヘキ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲スヘシ

第四百十條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第四百十一條 關席裁判ニ係ル刑ノ旨渡ニ對シテハ檢察官ニ非カレハ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百十二條 民事原告人及ヒ民事辯護人ハ私訴ノ旨渡ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百十三條 關席裁判ニ因リ刑ノ旨渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得

第四百十四條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第四百十五條 故障ノ申立ハ關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲スコシ

第四百十六條 重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヨ判決ス可シ

其故障ヲ受理スヘキ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲スヘシ

第四百十七條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第四百十八條 關席裁判ニ係ル刑ノ旨渡ニ對シテハ檢察官ニ非カレハ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百十九條 民事原告人及ヒ民事辯護人ハ私訴ノ旨渡ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百二十條 關席裁判ニ因リ刑ノ旨渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得

第四百二十一條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第四百二十二條 故障ノ申立ハ關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲スコシ

第四百二十三條 重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヨ判決ス可シ

其故障ヲ受理スヘキ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲スヘシ

第四百二十四條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第四百二十五條 故障ノ申立ハ關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲スコシ

第四百二十六條 重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヨ判決ス可シ

其故障ヲ受理スヘキ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲スヘシ

第四百二十七條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第四百二十八條 故障ノ申立ハ關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲スコシ

第四百二十九條 重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヨ判決ス可シ

其故障ヲ受理スヘキ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲スヘシ

第四百三十條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第四百三十一條 故障ノ申立ハ關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲スコシ

第四百三十二條 重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヨ判決ス可シ

其故障ヲ受理スヘキ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲スヘシ

第四百三十三條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第四百三十四條 故障ノ申立ハ關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲スコシ

第四百三十五條 重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヨ判決ス可シ

其故障ヲ受理スヘキ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲スヘシ

第四百三十六條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第四百三十七條 故障ノ申立ハ關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲スコシ

第四百三十八條 重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヨ判決ス可シ

其故障ヲ受理スヘキ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲スヘシ

治罪法

第一章 大審院ノ職務  
第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ旨渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スコトヲ得  
▲卷看 明治十四年九月第四十五號布告(第二百二十八條參看)  
一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時  
二 裁判所ノ構成規則ニ背キタル時  
三 法律ニ背キ管轄違反ハ管轄ナリトシテ旨渡ヲ爲シ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ旨渡ヲ爲シタル時  
四 法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時  
五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時  
六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時  
七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルコトヲ得可キ場合ヲ除ク外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時



八裁判言渡ヲ公行セヌ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セザル時  
九事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セヌ又ハ其理由ノ齟齬アル時  
十擬律ノ錯誤アル時  
十一越權ノ處分アル時

第四百一十一條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノタメ定メタル規則ニ  
背キタルノ又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スコト得ス

第四百一十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第  
四百十條ニ定メタル理由ニ付キ上告ヲ爲スコト得

第四百一十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スコト得  
大審院檢察長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スコト得

第四百一十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公  
判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百一十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡  
ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百一十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其中立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ  
上告ノ申立書ハ其中立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百一十七條 上告申立人ハ其中立ヲ爲シタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出  
ス可シ

第四百一十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差  
出ス可シ書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百一十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作り一通ヲ大審院ニ差出  
シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出スヘキ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條 書記ハ前條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判  
所ノ檢察官ニ差出ス可シ

第四百二十一條 檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢察長ニ差出シ且意見アルキハ之ヲ添フヘシ  
檢察長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記スヘキコトヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十二條 上告申立人及ヒ對手人ハ代官人ヲ差出スコト得  
重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ルヘキ者トシテ上告ヲ  
爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代官人ヲ選任セザルハ院長ノ職權ヲ以テ其  
院所屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十三條 院長ハ刑事局判事ニテ專任判事一名ヲ命スヘシ  
專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閱シ其報告書ヲ作ルヘシ但自己ノ意見ヲ付スヘカラス

第四百二十四條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經  
由シテ其趣意ヲ擴張スヘキ辯明書ヲ差出スコト得  
專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタルハ之ヲ其報告書ニ添フヘシ

第四百二十五條 書記ハ開廷ヨリ三日内ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代官人ニ報知  
スヘシ

第四百二十六條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀スヘシ  
檢事及ヒ代官人ハ各其趣意ヲ辯明スヘシ

第四百二十七條 私訴ノ上告ニ付テハ檢察長最終ニ其意見ヲ陳述スヘシ  
上告申立人又ハ對手人ヨリ代官人ヲ差出サハルハ其儘ニテ判決ヲ爲スヘシ

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル  
ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スヘシ但後ノ數條ニ記載シ

第四百二十九條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスルハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル  
ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スヘシ但後ノ數條ニ記載シ



タル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルヲ因リ原裁判言

第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルトアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ボサ、

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シテ他ノ部分ニ關係ア

又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタルハ原裁判所又

ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キハ原裁

判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定テ示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲ス

第三百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シテ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シ

タル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナリシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司

法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲ス事ヲ得

第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シテ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ

哀訴スルコトヲ得

一 大審院ニ於テ前條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

二 訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サ、ル時

三 同一ノ裁判言渡ニ付キ二個ノ條件阻礙シタル時

第四百三十七條 哀訴ヲ爲サ、ル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲

スヘシ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辨

書ヲ差出スヘシ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲スヘシ

第四百三十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタルハ其判決ア

ルマテ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ヲ爲メ之

ヲ爲スヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現

ニ生存シ又ハ犯罪前已ニ生去シタルノ確證アリタル時

二 同一ノ事件ニ付キ其犯ニ非スニテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

三 犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルヲ證明シタル時

四 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

五 公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルヲ證明シタル時

第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スヲ得ヘキ者左ノ如シ

一 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

二 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控裁判所ノ檢事長

三大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スヘシ

四 刑ノ言渡ヲ受ケタル者



五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬  
 第四百四十一條 再審ノ訴ノ消滅シタルニ拘ハラヌ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得  
 第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證據書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ  
 原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審院檢察長ニ差出スヘシ  
 第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢察長ノ請求ニ因リ速ニ專任檢察一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ  
 第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ開キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢察長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ  
 第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由スルコトヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ控訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キコトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規程ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ  
 第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナリ原裁判言渡ヲ破毀ス可シ  
 第四百四十七條 再審ノ言渡ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告ス可シ  
 第三章 管轄ノ定ムルノ訴  
 第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トト問ハヌ管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又逃避ノ原由若リハ非常ノ事變ニ因リ訟訴事件ヲ管理スルコト能ハサル時ハ檢察官其他訟訴關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スコトヲ得  
 大審院檢察長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訟ヲ爲スコトヲ得  
 第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ  
 第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢察長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ  
 第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴  
 第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生ズルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得  
 第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院判事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ  
 第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトヲ速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ  
 第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ機嫌ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得  
 第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スコトヲ得  
 民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スコトヲ得  
 第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書ニ通常原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ  
 書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得  
 第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ  
 第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止

治罪法



第六編 裁判執行復権及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行スヘカラス

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ逮ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出スヘシ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行スヘキノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲スコシ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行スコシ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニヨリ之ヲ爲スコシ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收スコシ

▲參照 明治十四年十二月司法省丁第二十五號達

治罪法第四百六十二條第二項罰金科料費用及ヒ沒收物品ノ徵收ハ書記局ニ於テ之レヲ擔當シ會計主任ヘ引渡ス可シ可心得此旨相違候事

破壞又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分スコシ

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印スコシ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ關席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シ得タル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作り左ノ條件ヲ記載スコシ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一 犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二 罪名刑名

三 再犯

四 裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五 對審裁判又ハ關席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ備置スコシ

違警罪ノ既決犯表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ備置スコシ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決スコシ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就ケタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致スコシ

裁判所ニ於テ本犯ナルコトヲ認定スルハ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ會テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼出スコトヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲スコシ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サズ

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章 復権

第四百七十條 復権ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲スコシ

復権ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住ムル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出スコシ

第四百七十一條 復権ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

一 裁判言渡書ノ謄本

二 主刑ノ期間特赦又ハ期間免除ト爲リタルコトヲ證明スル書類

三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書



四賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書

五過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閱シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏スヘシ

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニヨリ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知スヘシ  
前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條 復權ノ裁判アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ送致ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ原本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルコトヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由スヘシ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ特赦ノ申立アリタル時司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スコトヲ得死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セズ

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知スヘシ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致スヘシ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ



明治十五年二月六日出板御届  
編輯 青木榮次郎  
東京々橋區銀座丁目六番地

明治十五年二月六日出板御届

總價拾八錢

編輯 青木榮次郎  
東京々橋區銀座丁目六番地

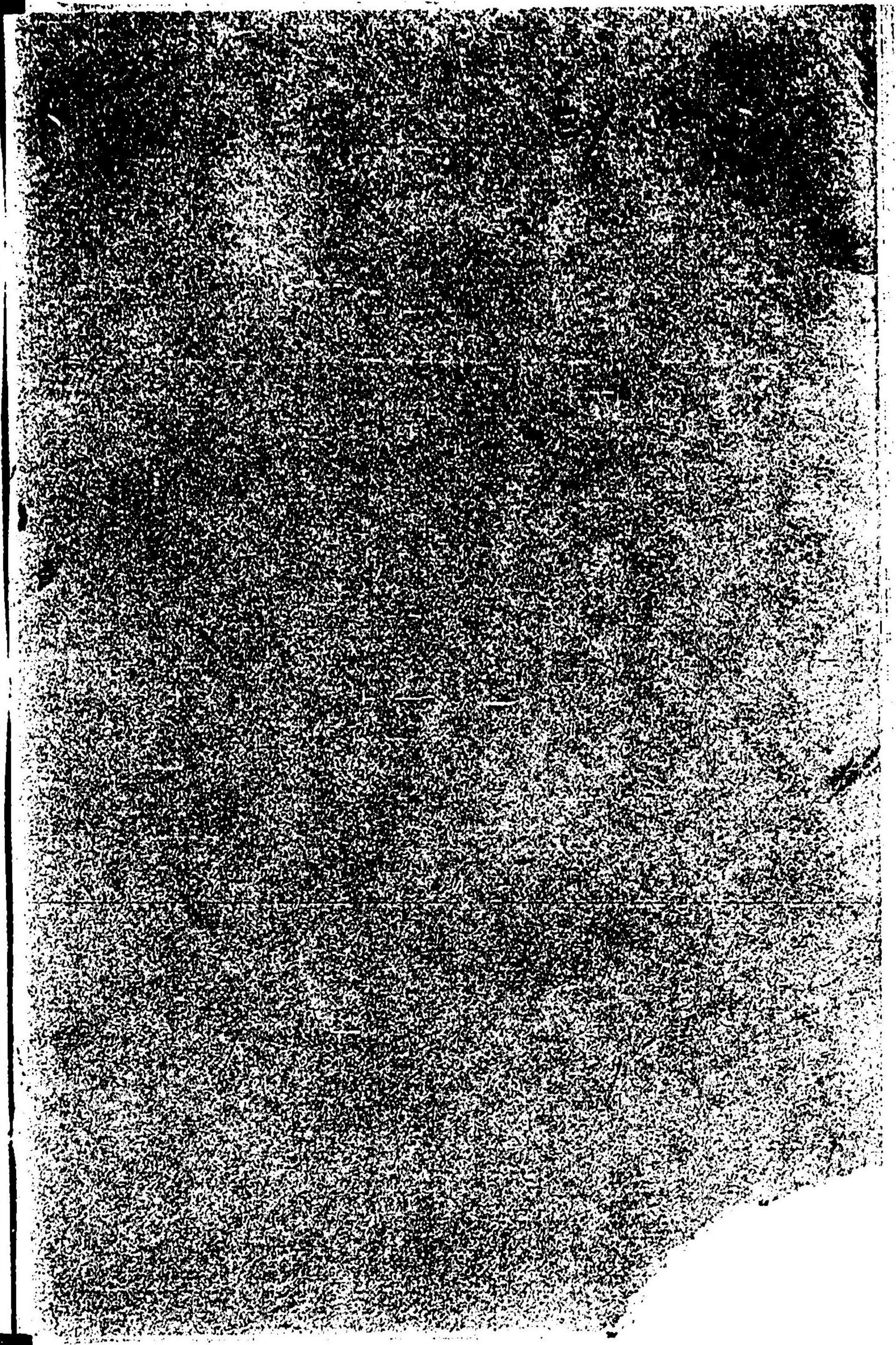


實木榮矢

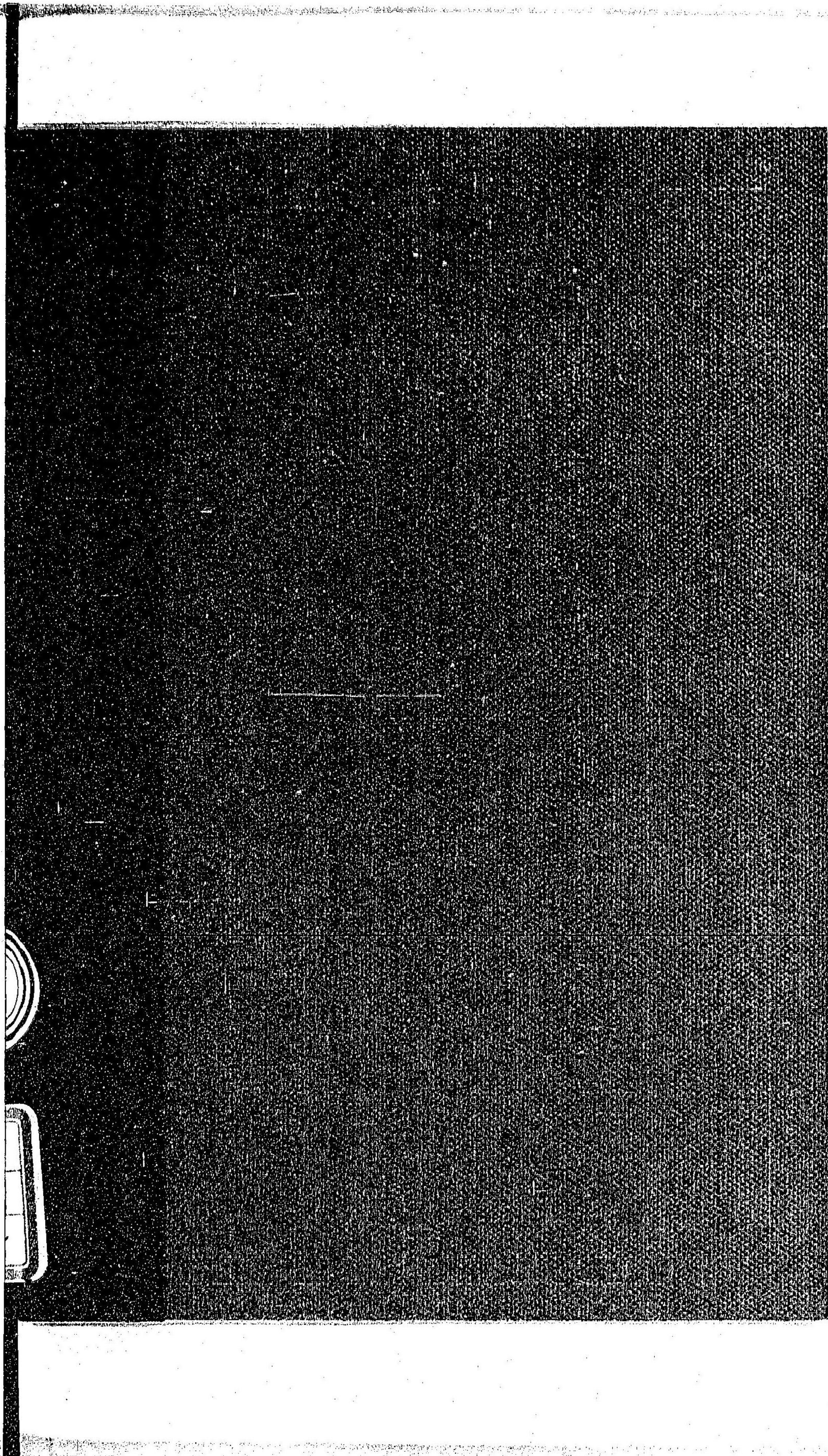
東京府芝罘町三丁目

東京府芝罘町三丁目











C2  
711  
035

刑法·治罪法 合卷

国立国会図書館

035804-000-4

CZ-711-035

刑法治罪法

青木 栄次郎 / 刊

M15

BBP-0390

